

史学科の思い出

出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	40
ページ	174-239
発行年	1988-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10318

史学科の思い出

も く じ

＜座談会＞

法政大学史学科創設当時を回顧して（竹内直良・村上 直・安岡昭男）

＜思い出——旧教員・卒業生から＞

思い出（河原正博）／亡き先生方を偲ぶ（関野 雄）／法政大学史学科の思い出（中村英勝）／草創期の史学研究室（芥川龍男）／思いだすまに（大森 實）／法政大学史学科に学んで（丹治健蔵）／ある旧制一期生の思い出（石渡隆之）／馳け足史学生（上原邦一）／思い出（松原正道）／思い出（中野清徳）／「学に忠なる」（川岸宏教）／夜に集う青春群像（山本清司）／史学科の思い出（丸山 朝 光）／思い出（伊藤 勲）／修士論文テーマとの出会い（安達 満）／大学院時代の思い出（平沢〔旧姓岡田〕 信子）／大学時代の思い出—丸山忠綱先生を中心に—（藤本孝一）／学生・大学院生の頃の思い出（池田 昇）／大学時代の思い出（清水久夫）／近代史文献講読会のころ（岩壁義光）／生涯苦学生（堀田トヨ）／大学時代の思い出（島村芳宏）／思い出雑感（根崎光男）／在学時代の思い出—師・友・サークル—（鈴木〔旧姓狩俣〕英美子）／史学科の思い出（小出輝雄）／通教生時代をかえりみて（天野繁子）／史学科の思い出（鈴木〔旧姓大熊〕理恵子）／法政大学西洋史ゼミの思い出（山田〔旧姓内野〕 朋子）／史学科雑感（濱田 浩）／近世史ゼミの思い出（酒井〔旧姓藤枝〕 恭子）／在学中の思い出（上田 浄）

＜思い出——現職教員から＞

外濠今昔四十年（安岡昭男）／法政大学で学んだ頃の思い出（村上直）／史学科考古学研究室をふりかえって（伊藤玄三）／ほめられたこと（倉持俊一）／思い出の記（中野栄夫）／所感（山名弘史）

法政大学史学科創設當時を回顧して

村上 今日はお休みのところ、安岡先生とお伺いしたわけですが、法政大学史学会が創設されてからそろそろ三十年を迎えることになりました。竹内先生は史学会創設以来おられて、丁度史学科の歴史をそのまま歩まれたようなものですから、今日は史学科創設當時の話、史学会が出来たときのころの話を、できるだけ裏話を交えながら伺いたいと思います。

ところで、先生が法政大学を去るにあたって特集され昨年度出されました『法政史学』を拝見しますと、先生は昭和十六年九月に高等師範部の講師を勤められておりますが、どのようなきつかけでこちらにお見えになるようになったのですか。

竹内 それはね、その前に小林元という人がいまして、つまり岩永さんと同じようにサラセン史をやっていた人で、岩永さんはその道の後輩に当たるのですが、サラセン文化研究所の草分けみたいな人です。この小林元君が金子直衛という先生がお辞めになる

昭和五十一年六月二十八日(月)午後二時より

法政大学名誉教授 竹内直良先生宅にて(以下敬称略)

出席者 法政大学名誉教授 竹内 直良

法政大学教授 村上 直

法政大学教授 安岡 昭男

ので後任にどうかと私を紹介してくれたのです。私は当時陸軍士官学校の教官をしていましたが、よしやろうと引き受けたのです。

私が最初に学校に出たのは十六年九月十一日(木)です。日記によれば「夜七時法政大学にて内藤智秀、野口保市郎先生、高橋教務係に小林君より紹介されて挨拶を済ませ、来週より講義を行うの由」とある。来週とは九月十七日のことです。初の出講日である十七日には、午後六時十五分より歴史地理科二年生に講義を行い、後半試験のことを話し、七時五十分まで教壇に立ったのです。このときのテキストは亀井高孝先生の『西洋歴史』を使い、私はポーランドの分割辺りから話をしました。この本は学生が皆んな持っていてこれを読みながら講義を進めたわけです。その頃の学生は中学校の先生をしていた人もいて、結構いい年をしていて、親父みたいな人ばかりでしたよ。

安岡 先生しながら夜学校に通っていたのですね。

竹内 二部だからね。

村上 先生、この間学生が教育実習にお世話になって荒川区の尾久にある学校へ行ったのです。その校長さんは法政大学の高等師範部の卒業生でして、荒川区の校長会の会長をしているのですが、実習生を非常に大事にされていました。教頭さんも法政の卒業生です。そこで私も法政の卒業生であるということをお話しました。

竹内 その当時の高等師範部の卒業生は非常に勢力があつて各地に出ていましたよ。

私は法政と駒沢に戦時中から行っているけど、両校の高等師範部は全国的に隠然たる勢力を持っていたね。

安岡 その頃の校舎はどうでしたか。

竹内 もちろんその頃は燃えない前の校舎ですから、本館が入って左の方に教授室があつて、そこに休んでおつて、授業にはそこからずうっと奥の方に入つた校舎で行つたと思いますから、今の六角校舎より先の今の図書館の校舎じゃなかったかとおもうが。

村上 その頃のキャンパスは今より随分小さかつたんでしょう。

大学院の辺りはどうだったのですか。

安岡 その辺りは井上英語学校とかいうのがあつたと思いますよ。

竹内 そうです。まだ角は法政の敷地ではなかったのです。

村上 僕らが通つていた頃はずっと小さい感じがしましたが、今は政文堂の方まで広がっていますよ。

竹内 そうだね。英語の井上十吉先生の実家、燃えてしまった後

法政大学史学科創設当時を回顧して

に通信教育が使っていたね。今の大学院棟のある辺りだね。それから後に濠向こうに移つたのです。

ところで日記を見ると、私は毎週真面目に講義を行っているね。その頃の高等師範部の部長は城戸幡太郎さんだったが、きみの話が好評なものでもっと講義を持つてくれといつて増やされた記憶があるよ。

村上 それで昭和十六年といいますと、丁度太平洋戦争が始まつた年で、それからずっと戦時体制になるわけですが、その頃の飯田橋から外濠公園辺りの景色はどうでしたか。桜並木はあつたのですか。

竹内 それ程植わっていなかった。私は夕方行つて夜帰るのでそんなに印象に残っていないね。

安岡 桜並木は戦後ではないですか。

竹内 それに私の勤めていた士官学校が市ヶ谷台の向かいにあり、そこから通うのが便利であつたのでその当時の外濠の印象は余り残っていません。神楽坂は昔の情緒が残つていて実によかつたがね。戦後は駄目ですね。

安岡 その当時市ヶ谷から飯田橋にかけては今みたいにビルが建つていなくて屋敷街ですね。

竹内 お濠の辺りはせいぜい二階建の建物がずっと並んでいるだけで静かでした。

村上 先生、通信博物館がありましたね。今の郵便局ですか、飯田橋会館のあるところですか。

竹内 ありました。戦後まもなく丸山忠綱くんと二人で入つたこ

とがあります。

村上 またそばにキリスト教の教会がありました。

竹内 あれは日本キリスト教会といって、飯田橋の教会と呼ばれていた有名な教会で、立派な建物です。それから近くに大きく立派な邸宅がありましたが、今の前田建設のあるところです。それから通信病院がありました。もちろん戦前の建物ですが。

村上 僕は高峰三枝子が出ていた「暖流」という映画を観まして背景に病院が出てくるので何処かと聞いてみたら法政大学のとなりだというのでよく覚えています。

安岡 そんなに古い建物ではないですね。昭和十三年位のもですね。

竹内 そうだね、あの当時東京の代表的な近代建築としては、あれと、東京駅前の中央郵便局で、鉄筋コンクリートに大きな窓が取れたというのでいい例なのだ。もう一つは水道橋の東京歯科大学が近代建築として有名だった。

村上 とこであの辺りは震災に遭ったのですか。

竹内 あの辺りは残りました。神保町も古本屋は残りました。法政は燃えました。法政が燃える頃の教授室のメンバーで覚えているのは、日本史では東恩納(寛惇)先生、東洋史では鈴木(俊)先生、それと私は週一回より出講しなかったのであまり他の先生は知らなかったが、会ったのは地理の秋岡(武次郎)先生で、忙しそうに來てはすぐ教室に行かれる先生でした。それから野口先生。あなた教わりましたか。

安岡 教わりました。

竹内 呑気な父さんという感じで、のんびりした人でした。あの人は金沢の四高を出て博士になった。戦後まもなく言っていたが、戦時中奥さんがカリエスだったので、空襲警報が鳴ると、奥さんを背負って防空壕に運ぶのが大変だったと言っていた。ところが戦後、二十七年頃だと思うが奥さんを残して亡くなったので葬式に出かけたことを覚えていいる。それから心理学の波多野完治さん、英語の後藤さん、もう一人は長沢規矩也さん。

村上 法政大学が燃えたのは終戦のかなり前ですか。

竹内 それがね、近所が焼けて、夜帰ろうとすると空襲警報が発令され、焼夷弾がよく見えるんですよ。そのうち私の勤めていた士官学校が群馬県に引っ越したのでそこに疎開して自然に法政から遠ざかっていたが、法政が燃えたというのを聞いたのです。それからどきどきの中で群馬から東京に帰って終戦を迎えたのですが、法政が燃えたということは聞いていたのですが、その後どうなっていたかは知らなかったのです。

私は家内の里に帰ってしばらくしていたら、事務の村上という人から連絡があつて、学生が持っているから出てこないかということです。覚えていてくれたのかと嬉しく思いました。

村上 それで先生、昭和二十二年に文学部地理歴史学科が出来ましたが、そのときのいきさつはどうだったのですか。

竹内 旧制の文学部の二部に歴史と地理の学科をつくることになりまして、当時学部長だったと思うが、多田基さんから、歴史はあなたが世話してくれ、地理は新井浩さんに頼むというので、それではと私は引き受け早速先生集めに取っかかりました。まず

東大にいつて板沢武雄先生に会って相談したのです。このとき初めて板沢先生に会ったのです。先生はその当時まだ研究室にいたが、その直後に追放になったのです。先生は史学科創設の趣旨を聞くと、それでは誰か適当な人物を送ろうと快諾され、丸山忠綱君なら十分教えられるだろうと紹介してくれたのです。

村上 丸山先生はその頃どこにお勤めだったんですか。

竹内 丸山君はその頃大学院の学生で、本郷の赤門の向かいにあったお寺（法眞寺）の書院の二階に下宿していたと思う。

安岡 丸山先生はどこかの講師をなさっていたようですが。

竹内 やっていたとすれば日大かどっかの講師でしょう。それでお会いするときどんな人かなあと思っていたら、眼が大きく丸い人だった。お会いして日本史の専任になってもらって講師を集めて欲しいと言ったのです。それから二人で東洋史はどうしようかと相談して周藤吉之さんに頼むことにしたのです。

村上 周藤先生はその頃外国から帰られていたんですか。

竹内 あの人は東大の東洋文化研究所にいたんです。それで私と丸山さんと周藤さんの三人で講師を集めるために駆け回ったのです。そのとき集まった面々は、日本史では斎藤忠、笠原一男、杉本勲、小西四郎、東洋史では関野雄、和田久徳という人たちだった。藤井甚太郎先生はまだいらっしやらなかった。

安岡 最初から専任ですか。

竹内 専任だけど講師なんだよ。私は二十三年六月頃専任になったのかな。変な時期だった。

村上 先生は昭和二十二年六月に文学部教授になっておられます

ね。

竹内 二十二年六月か。私はその前からもうすでに専任の仕事をしていたからね。

村上 準備期間だったのですね。

竹内 教授でも講師でも準備委員だね。月給を貰っていたから。

村上 月給は専任並だったのですか。

竹内 ここに当時の俸給表があるが、「昭和二十四年四月よりこれを実施する」として、二十二年、二十三年の俸給が書いてある。周藤さんは一七一五円、私は四六五〇円ですが、教養部を兼任していたので五五〇〇円でした。

村上 随分高かったのですね。先生は講師に登録されておりますが、周藤先生は講師だったのですね。

竹内 そうそう、どっかに勤めていたから。

それで東洋史では人数が少ないので関野さんと少し遅れて和田さんに来てもらい、西洋史では、清水博、的場徳造、中村英勝さんらに来てもらったのです。

村上 中村英勝先生も古いわけですね。

竹内 中村さんは古い。史学概論は特殊な人でなければ持てないからね。

安岡 西洋史の人選はどうなされたのですか。

竹内 西洋史の場合は、私が親しい東大の山中先生のお宅に行って相談して決めました。それからしばらくたって、史学科に重みをつけようと考えていたとき、藤井甚太郎先生が実践がどうも面白くないと言っていたのを丸山さんが聞いていてそれでお話に向

ったのです。藤井先生は史学科創設当時にはすぐに来られず、史学会のできるころにいらっしゃったのです。

村上 それで、旧制の一回が二十二年、二回が二十三年とありまして、僕は二十三年の入学ですが、新制は二十四年にできますが、旧制と新制がある一時期一緒であったこともありますね。あの頃は嘉悦学園の校舎を使いましたが、丁度その頃は先生に教わりましたが、夕方窓側に座っていますと、本校の方から先生と藤井先生と丸山先生の三人が一緒に坂のところを登ってくるので先生たちのおいでになるのがわかりました。

竹内 その頃は靴を脱いで校舎に入ったり。

村上 しばしば電気が消えたり、冬は寒かったですね。

竹内 停電のときなど、せっかく来たのですぐ帰るのも惜しいので何か話してくれというのでよく雑談をしたこともあります。皆んなシーンとして聞いておった。

村上 あの頃は皆んな遠くから来ていましたので少しでも聞き漏らすまいという意気込みもありました。

竹内 そうそう、今まで学校という雰囲気接していなかったからね。

村上 そうですね、戦時中は学徒動員ですからね。

竹内 そういう点で皆んな学間に飢えていたからね。机がなくて前の方に座ってノートをとっていたよ。

村上 今と違って少しでも聞きもらすまいと熱心にノートをとりました。本がなくて先生の講義が唯一の本のようなものでした。それで僕らの頃には苦学生が多かったので試験の前になると休ん

だところを補うため先生の講義をプリントして売ったものです。それ位熱心だったと思います。

安岡 年輩者も多かったですね。藤井先生を渡辺省三さんが迎えに行くこと事務長がきたと思ったと笑っていました。

村上 年格好を見ますとどちらが先生か学生か判らないくらいでしたね。

竹内 渡辺君は私より十歳位上だったから、丁度今の中村越さんと同じ位だね。外に久下、新田さんが年上でしたね。

安岡 渡辺さんはこの三月に大妻女子大をお辞めになりましたが、他に二か所ばかり集中講義に出掛けているそうです。

竹内 辞められましたか。

村上 ところで先生、新制ができましたのが二十四年四月ですが、あの頃旧制と新制というので教授などのスタッフもいろいろ考えておられたのですか。横すべりですか。

竹内 そうです、重なっていたから忙しかったね。教室をあっちへ行ったりこっちへ行ったり。だけど結構楽しかったよ、嫌な思

い出は残っていないものね。

安岡 私は新制三回の入学ですが。

村上 僕は旧制二回で二十六年の卒業です。

安岡 そうすると私は新制三回の卒業になるわけですね。新制三回ですけれど一年から新制となったのは私たちが初めてではないですかね。

村上 入学したのは何年ですか。

安岡 二十四年です。

村上 横すべりしたんですか。

安岡 そうです。高等師範部から横すべりしたんです。高等師範部を一年やって教養部に入ったのです。

村上 そうすると僕は二十三年から二十六年ですから一緒にいた時期があるんですよ。

安岡 二十四年四月には高等師範部一年に入って、二年になると横すべりして、それで今度また三年になって専門に進んだら高等師範部を卒業した人が編入してきたので一緒になったのです。竹内 そういうことがあったね。講義は別々にしたように思うが。

安岡 そうです、高等師範部も残っていた時期もあるのです。

村上 それで旧制から新制に割合すらすらといったのですか。

安岡 私に移ったのは、歴史地理科だから歴史をやるうとしていたのに、入ったら新井先生が、ここは歴史地理科というのが本来は地理が主なんだというのです。歴史は日本史・東洋史・西洋史の概説がありました、地理の科目が多かったですね。

竹内 それはね、歴史の方が難しかったんだよ。戦争中私は小林君に紹介されて引き受けてから一年位してからだが、高等師範部としては一定の点数を取れば中学校の免状を貰えた。しかし、地理の方は貰えたのだが、歴史の方は試験問題が難しかったのかなかなか中学校の免状は貰えなかった。そういうことで地理が威張っていたんだよ。

安岡 市瀬さんなんかはずっと地理にそのままいて地理学科に進んだのですね。

法政大学史学科創設当時を回顧して

竹内 三井さんもいたんでないかね。

安岡 三井さんは私の頃は助手だったと思います。

竹内 出身は地理でしょう。

村上 そうです。年齢は僕より少し上です。

安岡 それで史学科ができるということで私は教養部へ移ったのです。

竹内 それから、やがて一部に変わるわけです。

安岡 そうです、二部から一部に変わるときにもまた重なる時期があるんです。

それから板沢先生がいらっしゃいました。

竹内 板沢先生は追放が解除になってきたのです。丸山さんが尽力されました。

村上 二十五年九月にガリ版刷りで「法政大学史学会会報」第一号が出ています。

竹内 これは二部のときだね。

村上 これには先生が「史学会設立までの経過」と題してお書きになっているんですが、それを拝見しますと、「当法政大学には古くから高等師範部に歴史地理科があり、その出身者は現在社会の各方面特に教育界に活躍しているのであるが、終戦後間もない昭和二十二年の春、文学部に史学科が設置されることになり、更に昨昭和二十四年には新制大学の発足と共に新たな学生がこれに加わり、以後逐次発展拡張するようになった。この間、教授学生は常に融和しつつ、相携えて広く深く各種の研究に没頭していたのであるが、本年昭和二十五年一月頃から当学科教授講師学生を

主体とする法政大学史学会を設立し、まとまった研究機関を組織しようとする希望が史学科研究室から起り、取敢えず二月十八日午後別記の様な公開講演会を開催した。その後三月十二日教授（藤井、竹内、周藤、丸山）及び史学科学生委員（渡辺、清水、永浜、笹目、安藤）と協議の上史学会会則案を作成した。三月二十五日卒業式（旧制史学科第一回卒業生を送る）終了後、卒業学生に史学会の成立事情を説明し入会を勧めた。新学年に入った四月二十四日別記の如く新入生歓迎会を開いた席上、在校生一同に藤井教授より史学会の設立趣旨につき、丸山教授より会則案につき夫々説明あり、一同の賛成を得、ここに学会は正式に成立を見たのである。」と書いてあるのですが、この頃はどのようなをつくるかかなり試行錯誤されたんですか。

竹内 史学会を是非つくらなければと音頭とったのは藤井先生です。

村上 東大の史学会などをモデルにしたのですか。

竹内 どうか判りませんが、藤井先生の意見ではなかったかな。

私は会則にタッチしていなくて後から聞いたのですが、たぶん藤井先生と丸山さんが作ったのではないかな。

村上 これはかなり議論が出たというわけではないですね。

竹内 すらすらと文章化が進んだのです。

村上 二月十八日の公開講演会には七十人位の人が集まって、先生の挨拶があり、続いて中村英勝先生の「イギリス議会の発達について」、藤井先生の「明治維新史の新しい見方考え方」、関野先生の「東亜考古学の現況」という講演がありました。場所が講堂

とありますがどこに当たるわけですか。

竹内 今の学生会館のところに大きな講堂がありました。

安岡 二階建のです。

竹内 木造の建物で一階にありました。何回目かに私が公開講演で話したときも部屋が一杯になりましたよ。

村上 先生、このように二十五年は史学科も出来て画期的な年です。やがて二十七年三月に新制大学院の人文科学研究科に日本史専攻もできたのです。二十五年から三十二年まで藤井先生が史学会の会長をおやりになっていますが、これは藤井先生が一番年長だったとか、史学科の主任をされていたとかいう理由ですか。

竹内 そうです。その時分にはまだ定年制はなかったし、部長でも今のように六十五才で終わりということもないし、あの頃で七十歳近くだったと思うよ。

〔註 この座談会は以上のところで終わっていますが、これは竹内先生のご都合により中止になったためです。〕

付記 この座談会は昭和五十一年に行なったものですが、貴重な記録ですので、特に掲載することにいたしました。

■思い出——旧教員・卒業生から■

思 い 出

河 原 正 博

はじめて法政大学高等師範部の講師として歴史地理科で議義をなすこととなったのは今から丁度四十年前前の昭和二十二年六月のことであった。

昭和二十二年と云えば、その五月に新憲法が施行されることとなり、制度はもちろん日本の各方面に大きな変動をあたえた年であったが現実には身のまわりで見えるもの、聞くものはほとんど敗戦直後の状況と同様で乱雑そのものであった。

廃墟にひとしい戦禍をうけた法政大学でも当然のことながら講義を行うべき教室が不足していた。そのため歴史地理科では大学の東側に隣接している女学校の教室が夜間はいっているもので、それを借りうけて講義を行わねばならぬ始末であった。

教室に行ってみると机にありつかなかった学生が多数、教壇の前の板床の上に腰をおろして座り、講義をうける有様で、それらの学生の前には各自の荷物がならべられているが、よくみるとそれに下駄も揃えて置かれている。当時、下駄が貴重品であったため、このように手近においたわけであるが、それにはもう一つの事情があったからである。すなわちその頃、電力不足のため停電がしばしばおこり——とは云え占領軍関係の建物にはまさに煌々

と電灯が輝きわたっていたが——講義中でも突然に暗やみとなってしまうのである。まさか塙保己一の和学講談所がこの学校の近くにあったせいでもあるまいが、教室が突然に暗やみとなってしまうのであるから、その日は休講とならざるを得ないわけで、学生はそのまま家に帰ることとなる。このような場合、所定の置き場に腹物をおいたのでは、突然の暗やみの中で自分の貴重な下駄を探しあてなどとうてい不可能であるので、各人は賢明にも講義中でも下駄を手近において対処したわけである。ちなみに、その頃の歴史地理科の人員は学校からもらった名簿によると九十一名である。その中、名前から判断して女子学生と思える者が九名で総数の約一割にすぎぬ。今昔の感にたえず、とにかくこの位の人数であるのに机にありつけず板の床上に座っていた方が多数いたのであるから、教室もよほどせまいものであったのであろう。

以上のような教室で講義を終えて講師控室へと廊下を帰っていると、もう講義の制限はとうに過ぎているのにもかかわらず悠々とまだ熱心に講義を続けている先生がおられる。窓をへだてているのでその顔は見えないが、その声が大きくて高いのであるから、聞こうと思わなくとも廊下までひびきわたって来るのである。もつともこちらは廊下を通り過ぎるわずかな間のことであるから、その講義の内容が何であるか判る筈もないが、その語中に讃、珍などの名前がはっきりと聞きとれる程であった。倭の五王に関する説明であることはまちがいない。そもそも私が歴史地理

科に出講するようになったのは、それまで講義をうけもっておられた東洋史学の周藤吉之先生のをうけつぐこととなったからであるので、当時の東洋史関係の先生方はよく存じていた。従ってこの大きな声でしかも時間を超過して講義を行っている先生が東洋史関係の先生でないことははっきりとしていた。

一体、魏志倭人伝の邪馬台国や倭の五王に関する問題は戦争中は勿論、敗戦までの長い間、それを避けて通っていたもので、特に国史——日本史——においてはその傾向が強かったようであった。しかし、敗戦によってその取扱いに新しい局面を迎えることとなった。戦後、倭の五王についての本格的な研究を最初に発表したのは東洋史の前田直典氏で、それは昭和二十二年六月、東洋史談話会における「倭王武の系譜——ヤマト（大倭）国形成の研究その一」と題する講演であった。五王の讀を応神天皇にあてるべきであると云うのがそれであった——昭和二十三年「オリエンタリカー」に「応神天皇朝という時代」と題して掲載——前田氏とは個人的にも交際があったせいか、氏の講演に感嘆していたその頃、今のべたようにたまたま廊下で讀の名前が聞えて来たので、その講義を行っている先生に特に関心をもったのである。

さて、講義時間を超過して大きな声で熱心に講義をなしておられた先生が、日本史の丸山忠綱先生であることはすぐ判った。それまでは面識もなかったこの丸山先生とはその後ほぼ二十五年間にわたり同僚として史学科で共に講義を行うこととなったが、あの大きな声と講義時間の超過と云う先生の特技は最後までやむことはなかった。丸山先生の講義をうけた方はおそらくあの大きな

声と講義時間の超過とをなつかしく想いおこすにちがいない。

（本学名誉教授）

亡き先生方を偲ぶ

関 野 雄

私は昭和二十四年四月に法政大学の専任になって、東亜考古学を講じ、二十六年十一月に東大に移ってからは、法政の方は非常勤として六十年三月まで勤めた。この通算三十六年は、現在までの生涯七十二年のちょうど半分に当たる。その間、史学科・地理学科を中心に、多くの先生にお目にかかったが、今回は、すでに故人となられた七人の先生について、思い出の一端を語ってみたい。

まず別格として、総長であられた大内兵衛先生。戦後間もないころ、書誌学の泰斗、長沢規矩也先生を先頭に押し立てて、大内総長のところへ賃上げ交渉に行ったいきさつについては、すでに丸山忠綱教授の追憶集『おもいで』に書いておいたから、御覧になった方も多かるう。大内先生には、そのほかにも何度かお目にかかったが、とにかくスケールの大きい大先生だった。五十八年館の学生の溜まり場に掛けてあった『論語』学而篇の一節は、先生の揮毫されたものだが、大学紛争のときから見えなくなってしまった。いま掛けてあるのかどうかは知らない。とにかく、あんな立派な堂々たる字の書ける学者は、もう日本にはいないのではないか。

史学科の藤井甚太郎先生は、一見、古武士のような風格があり、初めはちょっと近付き難い感じがした。しかし暫くお付き合いてみると、なかなかの好々爺で、私たちは先生のお話を伺うのを何時も楽しみにしていた。また、先生には「斗酒なお辞せず」の風貌がおりのあるようで、左党の私たちは御一緒に呑めるのを期待していたが、その実、大の甘党でいらっしゃるのを知って驚いた。なお『法政史学会報』の題字は、先生が揮毫されたものと記憶する。

板沢武雄先生は、私が東大の東洋史学科に入学した昭和十一年のころ、「日蘭交渉史」と題する講義をされていた。東洋史の学生たちは先生の点は甘いというので、みな大挙して聴講に押し掛け、私も二年続いて甲を戴いた。六十年たった今でもはつきり覚えている。法政で二十四、五年ぶりにお目にかかったら、前と少しも変わらずにお元気だった。

豊田武先生とは、昭和九年に私が旧制浦和高校の二年のとき、初めてお会いすることができた。当時、先生は目黒の本郷町に住んでおられ、先生と文部省宗教局で同僚だった私の義兄の家が、その近くにあったからである。休日など、先生は幼いお子様を抱いて、よく遊びに来ておられた。先生のあの頃の若々しさが、最後まで保たれていたのは、まことに驚異である。

次は地理学科の先生方。まず多田文男先生は、本務の東大のほか、法政・明治・駒沢大学の地理学も担当しておられ、私もこれらの四大学に出講していた関係から、二、三十年の間、ほとんど毎週どこかで御一緒になった。先生はその都度、例の急き込むよ

うな調子で、いろいろなことを話された。そしてそのさい、黄土の堆積と粒度分析といったような、私の研究に直結することを、親身になって教えて下さったのである。

続いて岡山俊雄先生。昭和三年わが国で最初に建てられた、かの有名な江戸川アパートに、最初から住んでいらっしゃることを、誇りにしておられた。昭和三十一年、私が谷中の平屋から目黒の公務員住宅の四階に引越すとき、わざわざ御自宅に招いて、アパート学の講義をして下さった。それが、その後三十年以上に及ぶ私のアパート生活に、どんなに役立ったか知れない。

最後に保柳睦美先生。前の両先生と同様、私にとっては誠によい地理学の先生だった。法政でお付き合いしている十年程の間に頂いた玉稿の抜刷は、相当な数に上る。なかでも、新疆のロプノールに関するものなどは、大いに参考になった。昭和五十三年の夏、新疆方面を旅する機会を得たので、撮ってきたスライドを是非一度見て頂きたいと思っているうち、ついそのままになってしまった。かえすがえすも残念である。

この八月に入って岡山先生、次いで保柳先生が亡くなられて、また淋しくなった。

私事に亘る思いばかりで恐縮だったが、七人の先生を偲べれるよすがともなれば幸いである。史学科・地理学科の創立五十周年を迎えるに際し、ここに先生方の御冥福を心からお祈り申し上げる次第である。

(元史学科教授・東京大学名誉教授)

法政大学史学科の思い出

中 村 英 勝

私はお茶の水女子大学が専任であったが、昭和二十五年四月から五十九年三月まで約三五年間にわたって、非常勤講師として法政大学文学部史学科に出講し、史学概論と西洋史特殊講義を担当していた。お茶の水女子大学を定年で退職したのは、昭和五十八年春であったから、本職とほとんど同じくらい長い間、兼任講師として勤めていたわけである。最初は、戦後、法政大学が新制大学として発足して間もないころで、そのころ、史学科の主任教授は、明治維新史を専門とされていた故藤井甚太郎先生であったのではないかと思う。私の父勝麻呂は旧彦根藩の出身で、東大史料編纂官として幕末外国関係文書の編纂に従事していたが、藤井先生は確か旧福岡（黒田）藩のご出身で、維新史料の編纂に従事しておられたので、そのようなことについてお話したような記憶がある。専任の教授として西洋史を担当しておられたのは、東大西洋史学科の先輩であった竹内直良さんで、竹内さんが東大の故山中謙二先生に依頼され、私がお茶の水女子大学の専任で史学概論や西洋史特殊講義を担当していたので、山中先生の推薦で、法政大学でもこれらの科目を担当することになったのではないかと思う。

当時は戦後間もない頃で、戦災の被害を受けた法政大学の校舎が十分に復興していなかったためか、授業の一部は、その隣で戦

災に焼け残った学校の校舎を借りて行なわれていたような記憶がある。そのころ東大史料編纂所におられた筈原一男さんも一時法政の非常勤講師をしておられ、講師控室でよくお会いしたような記憶もある。東洋考古学の関野雄さんはもとと法政の専任で、その後東大に移られたが、法政の非常勤講師を長い間兼ねておられたので、法政の講師控室でよくお会いし、東大定年後はお茶の水女子大学の専任にもなられたので、ここでも同僚となった。関野さんは、話術に優れた、話題の豊富な方で、この方と雑談をするのはいへん楽しいことであった。

私は史学概論を担当し、この科目は史学科の必修なので、私がこれを担当していた間の法政大学史学科の卒業生諸君は全てこの単位を取っていたわけである。私が最初にこれを担当していた頃は三十歳そこそこの若造で、マックス・ウェーバーやマルクスやデイルタイなどの史学理論の話を交えた講義をしていたが、その頃は、頭に白髪を交えた、当時の私の父親ぐらいに当たる年輩の学生もいて、「先生の話は翻訳調だ」といわれて、冷汗をかいた覚えがある。既に人生経験を豊かにもっていた人々が、私の未熟な話をよく我慢して聞いてくれたものと、正直いって、感謝したい気持である。その後、私の史学概論の講義は古代ギリシアのヘロドトス、トゥキディデスからの、中国の司馬遷からの、また日本の古事記・日本書紀からの史学史を中心としたものに変えたが、法政大学やお茶の水女子大学、後者の定年後は日本大学で、長年の間、専門のイギリス議会政治史のほかに、史学概論を担当して、歴史とは何かという基本問題について考える機会を与

えられたことは、ありがたいことであつたと思つてゐる。人類の歴史の意味と価値について、深く考えるようになったからである。

法政大学で長い間非常勤講師をしていた間の卒業生諸君のうちで、今でも毎年賀状をくれる人も何人かいる。そのうちには、法政大学の教授をしている人もいるし、全国各地で高等学校や中学校の先生をしている人々もいる。地方の博物館に行くと、法政史学科の出身で学芸員をしている人に会うこともある。

法政大学在任中の快い思い出の一つとして残っているのは、竹内教授が定年で退職された後任の教授として、誰かよい人に来てもらいたいという相談を受け、当時東京教育大学の教授をしておられた倉持さんを、そのころ史学科の主任をしておられた故豊田武教授に推薦したところ、よい人を推薦してくれてたいへんありがたいと感謝されたことである。私は以前、静岡県のお殿場にあった知人の家を借りて夏休を何回か過ごしたことがあつたが、その家の近くに倉持さんの家があつて、夏休中時々お会いしたことがある。戦後間もない物資の乏しいときに、たいへんおいしいお汁粉をこちそうになつたことなど、今でもよく覚えてゐる。その後二〇年はどたつて、教育大学が筑波へ移転するに当たり、文学部西洋史学科の教官は全員、移転に反対してゐた。教育大学が廃止されて、筑波大学という新しい形の大学が出来ることになる。と、教育大学の西洋史の教官は、これに反対してゐた立場上、筑波大学へ行くわけにはいかない。ちょうどそのとき法政の史学科で竹内教授の後任を探してゐたわけである。後で聞くとこころによ

ると、東京学芸大学でも倉持さんに声を掛けようかとしてゐたところで、法政の方が間一髪早かつたわけである。教育大学と学芸大学はともに国立で、そのほうが倉持さんにとっては、何かと都合がよかつたかもしれない。しかし、多くの人々が経験するように、就職とか転職とかいうような場合には、偶然的な事情とか、ほんの一時の前後関係が大きく影響することがある。その後の法政大学での倉持さんの活動や、学問上の業績から見て、この人を迎へられたのは、法政の史学科にとって全くラッキーなことであつたと思つてゐる。このようなことを述べるのは、倉持さんにとってはご迷惑なこともかもしれない。また、これは冗談であるが、昔お汁粉をこちそうになつたから誉めてゐるわけでもない。私は彼の人柄をよく知つてゐたからこそ、自信をもつて推薦し、このことを快い思い出としてゐるので、敢えてここに書かせて頂いたしだいである。

そのほか、法政大学の思い出として残つてゐることがいくつかあるが、法政で新制の大学院が設置されたとき、大学院の校舎ができて、その屋上の縁に付けられた

HOUSEI UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL

というネオンの輝きが中央線の車中からよく見えるようになったことである。これは、今でもそのように見えるかどうかは、最近その辺は地下鉄で通るようになったので、よく分からない。当時はこれについて賛否の両論があつたようであるが、その頃の法政大学の総長大内兵衛先生は、私立大学は国立大学と異なつて、こういうプロパガンダをする必要があるのだといわれたということ

が、どういいうわけか、頭に残っているのである。大内先生は、誰でも知っているように、戦前、東京帝国大学経済学部教授で、左翼教授のひとりとして大学から追放されたが、戦後、復学された。一時は、総理大臣も勤まる人だ、などといわれたこともあった。上述の話をきいて、なるほどと思ったことが、奇妙に頭に残っているのである。

三浦半島の三崎の近くの油壺に東大理学部の臨海実験所がある。その近くに「高齢者世話ホーム・エデンの園」という有料老人ホームが昭和六十一年十一月に開設された。ここに岩生成一先生が六十二年夏頃から入居しておられる。私も時々ここへゆくので、先生にお会いすることがある。岩生先生はもう八十七歳の高齢になられたが、東大の国史学科を卒業されてから史料編纂所に入られ、前に述べた幕末外国関係文書など、海外交渉に関する史料の編纂にもしばらく従事された後、オランダやイギリスに留学され、日本との関係に関する古文書を収集して帰国され、台北帝国大学の教授となられた。昭和の初年から苦心を重ねて搜索・発掘された史料により研究された成果が、昭和十五年に『南洋日本町の研究』として刊行され、学士院賞を受賞された。昭和二十二年に台湾から引き揚げられて後、翌年東京大学教授に就任、三十六年定年退職後、日本大学教授、翌年から法政大学教授となり、四十七年定年退職された。こういうわけで、法政大学にも一〇年間、専任教授として在職されたわけである。現在、日本学士院会員で、昭和三十三年には『朱印船貿易史の研究』が刊行され、六十二年には『続南洋日本町の研究』も刊行された。これらの研究

成果は先生の六〇年以上にわたる絶え間ないご研鑽の賜物であって、学問一筋に歩んでこられた先生のご生涯とお人柄には、全く頭の下がる思いがするのである。最近も、先生としばらくお話をする機会を与えられ、上述のような、これまでの研究生生活について、いろいろお話を伺った。九十歳に近くなられた先生としばしばお会いすることができるようになったのも、何かの奇縁であると思っている。

以上のほか、法政大学について思い出すことはたくさんあるが、今回はこれくらいにとどめさせていただきたいと思う。

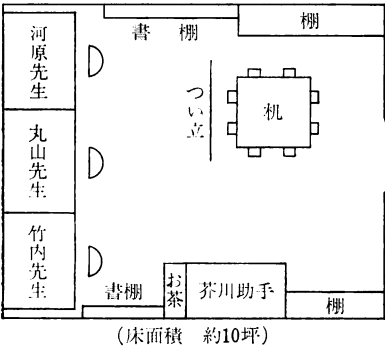
(元史学科非常勤講師・お茶の水女子大学名誉教授)

草創期の史学研究室

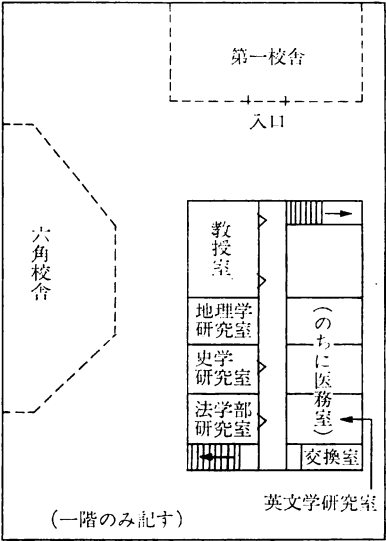
芥川 龍 男

「法政大学史学会通信」第五号(昭和三十九年十一月)に、「史学研究室変遷史」を書いた。その書き出しには「夜の史学科から昼の史学科になってもう四年目を迎えた。法政大学裏に隣接する嘉悦学園の校舎を借用して、戦後間もない昭和二十二年から二十五年までの、衣・食・住のどん底時代に、しばしば訪れる停電に悩みながら学んだ小生らにとっては今昔の感がある。うっかりしていると、その頃生まれた人が、史学科一年として入学してくる日もすぐやって来る」とある。今や「史学科一年」どころか卒業していることになる。現在の研究室は第一校舎(我々の時代には講堂であった)の四階と、八十年館に二室となっている。面積の

思
い
出



第 二 図



第 一 図

の面では、草創期の数倍に拡大されたことになる。数年前に研究室を訪れたときに、ふと見ると見覚えのある木製の片袖机が健在であった。まさしく筆者が助手になってしばらくしてから備えられた新品の机であった。この机は数回におよぶ研究室の引越しをしてようやく落ち着く場所を見つけたことになる。このあたりで往時を振り返って見るのも意味のあることと思い、ここに貴重な紙面を拝借する次第である。

最初の研究室は、昭和二十五年早々に使用が開始されたと思う。はじめは地理学科と共用で、正式には史学研究室と呼んだかどうか思い出せない。筆者が助手になったのが昭和二十七年六月であったが、そのときは既に共用ではなかった。この研究室棟には、教授控室・小会議室・電話交換室と二、三の研究室が一階にあり、二階は各学部長室と研究室になっており、木造モルタル塗りの建物であった(第一図参照)。

研究室の内部についてみると、第二図のような机の配置になっていた。部屋の真ん中に百ワットの電球が一個、さらに部屋の三方に六十ワット程度の電球が、それぞれアルミ製皿型、というよりも、陣笠スタイルの笠をつけてぶら下がっていた。暖房設備は、昭和二十八年三月頃迄は大きな箱火鉢で木炭を使用した。同年冬からその冬だけ石油ストーブの新品(奇妙な形をしていた)を用い、次の年の冬からはダルマ・ストーブになった。

第二図は平常みられた研究室内の配置図である。初期には河原先生の席は和田久徳先生であったし、その右横には後に藤井甚太郎先生の個人机が置かれた。入り口横にある机は、二メートル四

法政史学 第四十号

方程あり、八人くらい座って読書・討論・喫茶・食事等々に用いられていた。さらに史学会関係のポスター作成・プリント・「法政史学」の発送や委員会、卒業論文の口述試験もこの机で行なわれた。また昭和二十八年の一月から五月までは、故藤井甚太郎先生の古稀祝賀事業の事務局ともなり、学界著名の諸学者の来室も多く、毎晩十時頃まで部屋の電灯は消えなかった。この部屋に入りした当時の学生諸君のなかには……と思いをめぐらすと、その人その人によって、ドアのノックの仕方が違ったり、講義に出て行かれるときの先生方の後ろ姿などそれぞれ個性的なものがあつたことも思い出される。

とにかくこの木造の研究室は、昭和三十一年七月十七日午後一時頃、図書館員が来室して、「この建物を壊すことになったので、図書などを一時預かりますからよろしく」とのこと。先生方に緊急連絡をして、二十一日大学院二〇四号室の片隅に助手の机と、必要書類を移したことによって姿を消してしまつた。このような移転からはじまつて、現在の第二・五十八年館の位置に建てられた仮小屋へ、さらに第二講堂（現在のサークル棟のあたり）へと、さすらいの旅に出ることになる。筆者の助手時代六年間の大半はこのさすらい時代であつた。第二・五十八年館三階の真新しい研究室には、次の安岡助手（現教授）が就任した。史学科自体も二部から一部へ移行するなど、転換期に入ることになる。筆者も昭和三十三年三月末に退職した。早いものでもう三十年を経過したことになる。

（旧制学部一回卒業 本学第二教養部教授）

思いだすままに

大 森 實

過ぎ去つた光陰はすでに三十年。いま當時を想い起せば、一瞬の感がある。書架に並ぶ一群の古びたノートは、過ぎし日の諸先生の講義の有様をまざまざと私に蘇らせる。時には和服姿で教室に來られた藤井甚太郎先生の明治維新史、板沢武雄先生の日本仏教史、雄弁で詳密な丸山忠綱先生の日本史概説や史籍解題、瘦身に似ず骨太の思想を持った竹内直良先生のキリスト教史、物静かな河原正博先生の東洋史概説、さらに大学院では児玉幸多先生の歴史地理、「史記」を読んだ関野雄先生の東洋史学演習、丸山先生の日本史学原典研究など、とりわけ板沢先生の蘭学史と岩生成一先生の蘭学史、鎖国論、日本関係西籍解題、日欧交渉史の諸講義、C・R・ボクサーの『Jan Compagnie in Japan』の輪講などは、自然科学系の大学を卒業して研究上の必要から史学の研究法を学ぼうとしていた私に、大きな示唆を与えてくれた。この他にも両先生は、文字通りのサービスでオランダ語の手ほどきをされた。板沢先生のそれは直ちにファン・クレフエンズの『国際法から見た日蘭関係史』（本書を一九七九年オランダに留学した際に古書店で入手したことも何かの因縁であろうか）の一節や西周・津田真道両名の渡蘭関係文書のタイプ刷りを読ませるといふ実戦型であり、岩生先生のそれは初歩の文法から始めて、時折オランダ語での一問一答を交えながら、一応の水準まで進むという

正統型の違いはあったけれども。こうして昭和二十七年～三十七年の板沢、同三十八年～四十六年の岩生両先生の専任教授の時代に、法政大学における蘭学史と海外交渉史研究の伝統が形成されたのであった。

この伝統形成の最初の顕著な事件は、板沢先生の主唱で昭和三十六年八月に法政蘭学研究会（メンバーは片桐一男、向井晃、安岡昭男および筆者。後に黒江俊子加わる）が結成されたことであり、会員は直ちに和蘭風説書の収集を開始した。これは板沢先生の既刊の研究を増補し、完成させるためであった。翌年同先生が没せられた後、同会は岩生先生の指導を受けることとなり、風説書の収集も原点から再出発させて組織的系統的となりさらに研究も並行して行なわれた。その成果が、日蘭学会編『和蘭風説書集成』上下二巻として刊行されたのは、昭和五十二および五十四年であって、会の発足から十八年の歳月を隔てている。この間いくつかの障害があった。学生運動が激化した頃、大学構内に会員が集まって作業するに適當な室がないという事態に陥ったので、夏期休暇の一時期渋谷の岩生先生宅を拝借して作業を続行したことがあった。初めの二日間指導された後軽井沢へ戻られる折に、必要な日数だけ自由に先生宅を使うようにと言われて鍵を私に託されたことがあった。われわれは十日程留守宅で予定どおり作業を行なった。やがて新宿駅南口から程遠からぬ家庭クラブ会館に私が交渉してロッカーを借用して参考文献や原稿を保管し、同館の一室において定期的に会合できるようにしてこの事態は解消したが、この時ほど岩生先生の人を信頼することが厚いこと

を感じたことはない。

先生はまた一面では、柔軟な態度ではあるが自説を通す剛の性も持っておられる。大学卒業以来現在までの激動の時代を実証史学一筋で通してこられたことによってもそれは窺えるが、私はその態度を眼前に見る機会を持った。財団法人日蘭学会の創立準備会議がパレスホテルで行なわれ、その席に私は陪席したが、オランダ側代表のベルフスマ大使その他、日本財界代表の有吉義弥日本郵船会長その他に伍して日本学界代表として緒方富雄蘭学資料研究会々長とともに出席された先生は、英語で進められる会議を物静かに聞きながら時折可否をはっきりと答え、事務局の構成、予定すべき学界事業の問題については意見を強く主張され、先生の意見に従って事が決着した。この時は大学の教壇では見ることができない先生の一面を見る思いがしたが、未だにこの会議の模様を忘れることができない。日蘭学会は、先生が理事長に就任して、昭和五十年一月に発足したが、先生の推薦を受けて私も事務局に関係することになった。その学術叢書第一として和蘭風説書集成を刊行することとなった際、先生とも相談の上、緒方富雄理事その他関係者にそれ迄の経緯を説明して、日蘭学会の四文字とともに法政蘭学研究会の七文字を角書に付けることについて奔走したことも、今は懐かしい思い出である。

岩生先生はその御專攻の故に多数の未刊欧文史料や洋書を活用され、講義や史学会の行事のあいまに学生に対して極力洋書を読むことを説かれた。これは先生の立場からすれば当然のことであるが、さらに広く一般の学生にも日本史を国際的視野から考察さ

せようとの配慮からであった。また法大在任中、年頭の講書始に「近世日本の海外貿易」について進講（昭和三十九年）、日本学士院会員への選任（同四十年）、朝日文化賞受賞（同四十三年）、勲二等瑞宝章に叙勲（同四十五年）、オランダ国女王からオランエ・ナッサウ勲章コマンドー章を授与する（同四十七年）という慶事や古希、喜寿、傘寿の祝宴など、教え子たちが祝いの席を設ける機会は何回もあったが、いつもそうしたことを固辞され、私の記憶には、学士院会員に選任された折の私学会館での小宴、オランダからの叙勲の際の緒方富雄先生と併せての祝宴、最近では昨年十二月の『統南洋日本町の研究』の出版祝賀会があるのみで、比較的地味である。ある年の夏休みに軽井沢の別荘を訪れた折の雑談のうちにその理由を尋ねたところ、皆に迷惑をかけたくなしいしまった派手なことは好まないとお話であった。また昭和四十四年に、先生と岡田信子、武田万里子、長尾政憲、根岸敏、福川一徳の諸君と私とで京都・奈良・天理へ史蹟見学の旅をしたことがあった。どこの宿であったか時間のつごうで先生が入浴中のところへ、失礼ではあるが私が後から浴場へ赴かざるを得ないことになった。洗い場に居られる先生に背中を流しましょうかと問いかけたところご返事がなかったので再度尋ねたら、その時はやや大きな声で「そういうことは結構です」と答えられた。あれを思いこれと思うと、先生には遠慮深いところがあるように思える。

これに反して研究特に書籍や史資料の購入整備に関してはひじょうに熱心で現在でもそれは変えることがなく、昨年オランダ滞在中の私のもとへ、先生がハーグの新しい公文書館の写真を必要と

している旨を拙宅から知らせて来たので、余暇を見て写真を撮り帰国後御自宅迄お届けしたが、これを以てしてもその研究心が旺盛なことが判明するのである。この他にも先生に関する思い出は多くあるが、別の機会を待つことにしたい。最後に、先生は法政大学でわれわれより若い世代に蘭学史・対外交渉史専攻者を何人か育成されたのち退職され、現在は神奈川県三浦市三崎に転居されて悠々自適の日々を送られて居ることを付記しておく。

（第二教養部教授・昭和四三年度院修了）

法政大学史学科に学んで

丹 治 健 蔵

私が創設後間もない法政大学第二文学部史学科に新制三年生として編入学したのは昭和二十五年四月のことであった。旧制の法大専門部政治経済科を卒業したあと、敗戦国となった日本の歴史をもう一度見直してみたいと考えたからである。その当時は、まだ空襲で焼けた校舎が復旧されておらず、大学に隣接していた嘉悦学園の校舎を夜間だけお借りして、そこで授業が行われていた。

やや小柄ではあるが眼光紙背に徹するような藤井甚太郎先生、歌舞伎の名優のように堂々とした丸山忠綱先生、重厚朴とな周藤吉之先生、貴公子のような関野雄先生、やさしいまなざしの和田久徳先生、そして礼儀正しくバリバリとした竹内直良先生などが専任教授として、それぞれ興味あふれる名講義を展開されたの

で、真冬でも寒さも忘れて一生懸命にノートを取ったことが懐しく想い出される。そして講師の先生方も、当時は東大教授の岩生成一先生をはじめ学界の第一線で活躍中のそうそうたるメンバーで、他大学に勝るとも劣らない陣容であるとひそかに誇りに思っていた次第である。

史学科に在学中、ちょうど入学して間もない四月二十四日(月)に嘉悦学園の教室で結成された法政大学史学会の学生委員となつて、現在の学生会館の位置にあつた木造の旧第二講堂において開催された公開講演会や史跡見学会、そして史学会の事務などを一生懸命にお手伝いしたのも、先生方のお人柄と熱意によるものであったと考えている。

やがて二年間という短い学生生活が終わるにあたり、これも今は無き木造の研究棟の一室で、クラスの一人ひとりが先生方から卒業論文など中心とする面接試験を緊張した気持ちで受け、お叱りを受けたり、励まされたりしたことが、史学科の良い伝統になっていたのではないかと思っている。

昭和二十七年四月から小田急線沿線の玉川学園に勤務することになったが、その就職試験に際し、藤井先生が毛筆で認めてくださった推せん状をもつて行ったところ、その真摯な名文をご覧になった小原園長の表情が微妙に変化したのが印象的であつた。

その後四年間、玉川学園の教員生活を経て、昭和三十一年四月に再び大学院修士課程に入学し、昼間は教員、夜間は学生というきびしい生活に入った。その当時は藤井甚太郎・板沢武雄両先生共にご健在で、多士済々の院生と一体となった授業は明るく活気

にあふれるものであつた。

また、大学院に入学してから近世利根川水運史の研究を志し、板沢先生のご指導で史料採訪をはじめていたが、ちょうど三年生として在学中の昭和三十三年十月からあの独特の天然ウェーブの髪型をした児玉幸多先生がはじめて法政大学の兼任教授となられてお見えになったのである。そして新刊の『近世宿駅制度の研究』をテキストとして講義を進められたので、交通史専攻の私にとつては大変参考になったが、それにも増して放課後に利根川水運関係の史料をお見せしていろいろと助言を頂いたり、難解な古文書を読んでいただいたりしたことが幸いであつたと思つている。そして板沢・児玉両先生の卒業面接を受けて、当時としてはモダンなあの大学院棟とも別れを告げたが、その後板沢先生のご推せん『歴史地理』九〇巻一号に「利根川舟運の展開」というテーマの論文を発表することができたのである。

やがて昭和三十三年四月から四十二年三月まで史学科の助手として史学研究室(第二58年館三階)で勤務することになった。ちょうど史学科が夜間から昼間に切り替つた時期で、その頃の学生は男女共に明るく個性豊かであつたように思われた。授業の合間には狭い研究室に大勢押しかけ、丸山先生や河原先生の机まで占領して勉強したり、話し合つたりのありさまであつたが、先生方は嫌な顔を一つも見せずによく学生の相談相手になつておられたのには敬服した。私も及ばずながら学生と近世古文書の講読会をつくつて一緒に勉強したり、コンパを開いて氣勢をあげたりしていたが、その学生中心の研究会が今日まで二十年間も続いてい

るのには感心している。

私が助手となってからもっとも力を入れたのは史学会であった。「法政史学」のほかに「史学会だより」なども芥川・安岡両先生のご協力により年四回まで発行することができた。これらの刊行物を学生諸君と一緒にたびたび麴町郵便局まで運んで行き、料金別納のスタンプを押して発送したことが想い出される。

当時の法政大学史学会会長は主任教授の岩生成一先生で、総会・例会・大会や見学会なども参加者が多く、総会の講演会には卒業生の村上直先生（当時駒沢女子短期大学教授）にもご出馬をお願いしてなかなかの盛況であったと記憶している。

私の助手時代は博士課程に在学し、勤務の合間に大学院の授業に出席することができたので、再び児玉先生の講義を聴講する機会に恵まれた。鋭い質問にひや汗をかくことがしばしばあったが、授業が終わってから研究についての相談に乗って頂くことができたのでまことに好都合であった。

当時、学部では藤本孝一・山本光正両君たちも児玉先生の「地方史学」を受講していたが、それら諸兄の話によると、やはり質問が多く、そのために先生に近い前方の席はみんなが敬遠して空いていたとのことであった。それだけに授業は緊迫し、実りの多いものであったわけである。

そのほかの先生方もみんな張り切って授業をしておられた様子で、放課後学生が研究室にきて講義の内容や先生方の講評をしているのがははえましく思われた。

私は昭和四十二年三月で助手の任期満了となり、後任の森陸彦

さんに事務を引き継いで兼任講師にして頂いたが、その後昭和四十八年四月法政大学の教授になられた豊田武先生などの後援もあって山本光正・渡辺和敏両君や私のゼミに出席していた平川新君などと共に少人数ながら法政大学交通史研究会をつくって勉強していたが、それらが母体となって今日の児玉先生を会長とする交通史研究会に発展したといっても過言ではないであろう。

これまで法政の卒業生は、児玉先生からもいろいろのご指導を頂いていたが、先生の古稀と喜寿のお祝いに際し、吉川弘文館のご好意により『日本近世交通史研究』ならびに『日本近世交通史論集』という二冊の論文集を交通史研究会のメンバーと一緒に発刊し、お贈りすることができたことを心からうれしく思っている。

私が昭和二十五年四月法政大学史学科に入学してから今日まで、かれこれ四十年近い歳月が流れてしまったが、「良き師良き友集い結べり」という大学校歌の歌詞にもあるとおり、法政大学史学科に学び良き師良き友に巡り会えたことが、私の人生にとってまことに幸せであったと有難く感謝している次第である。

（元史学科非常勤講師・昭和四十二年度院修了）

ある旧制一期生の思い出

石 渡 隆 之

「戦後」は終わったとか終わらないとか言われ出したのはずっと後のことで、法政大学文学部旧制一期生が在学した昭和二十二

二十五年は、まさにその「戦後」の真最中だった。というよりは、占領軍が闊歩する日本はまだ「戦中」の続行のような感すらあった。もちろん、そのときは、戦争が終わったという時間的意味での戦後という思い（それはもう戦死をする心配がなくなったという個人的な思いと重なっていた）はあったが、後に意義づけられたような政治的・経済的・社会的意味での「戦後」という認識はなかった。

戦時中、大学における文科系の学科は事実上廃止され、学びたくとも戦後は勤労学生を迎える適当な大学は見当たらなかった。自学自習しようにも書物の入手がたいへんだった。新刊書が出る和本屋の前に行列ができるという活字に飢えた時代だった。もちろん、書物どころではなく、その前に「食」という大問題が控えており、焼野が原の東京その他の都市では「住」の問題もまた緊急事であったことは、体験者ならずとも周知のことであろう。

そのようなとき、法政大学文学部地歴科学生募集の新聞広告を見た。昭和二十二年の、本来なら新学期が始まっているはずの四月の末か五月にはいつてからのことだったように記憶する。

試験勉強も何もせず（する余裕もなく）、前後の見境いもなく受験願書を提出した。はつきり覚えていないが筆記試験は地歴と英語、それに面接試験があったように思う。恐らく今だったらとても合格はしなかったであろう（それは自己採点でも明らかであった）。それが試験官の採点ミス（失礼）か、ふしぎに入学することができた（感謝）。語学はためだったが史学だからよかったのかなどと、しゃれにもならない理屈をつけて苦笑した。

思
い
出

入学はしたが通学がたいへん。当時の国鉄はスピードが遅く、運転本数も少ない。もちろん設備などはすこぶる悪い。遠距離通学の方が身は徒歩・乗換を含めて片道三時間近くかった。

学生の年齢はまちまち。二十代、三十代が多かったように思うが、中には教授より年長の堂々たる社会人もいた。

服装もバラエティーに富む。といっても華やかという意味ではもちろんない。古着まがいの縁のすり切れた背広などはふう（失礼ながら某有名老教授（故人）がそうであった）。復員兵とすぐ知れるカーキ色の軍服が多く、旧海軍士官の紺色の服などは上等の方であった。履物も軍靴が多く、中には下駄履きというのもあった。臨時に使用した嘉悦学園校舎の教室は板張りだったので、とくに上履が必要であった。

教室はほぼ固定していたが、時間割によってはその嘉悦に行ったり、六角校舎のラセン階段を上下した。

それでも夏はまだよかった。冬になると教室に火の気はなく、コンクリートの本校舎の床は冷え冷えとして、それが空腹を刺激した。教室内でのオーバー着用が黙認されていたが（実際には、教室の後方着席者のみが控え目に着用していた）、素手の指先は冷たく、かじかんだ手に息を吹きかけながら夢中でノートをとった。そのノートがまたひどい。いわゆる大学ノートは紙質が悪く、鉛筆に少し力を入れると破れ、インクではにじむ。また教科別にノートを用意すると何冊かを必要とするので無駄が多く（教科によっては半分も未使用に終わる場合があった）、ために一枚ずつバラの用紙に筆記してはクリップで止め、完結したところで

少し厚手の表紙をつけるという方法も考えた。

昭和二十三年四月、二年目に進んだとき、クラスは地理と歴史に二分され、いわゆる史学科は正しくは「地理歴史学科（歴史専攻）」となった（もともと、その正式呼称を知ったのは学年末、成績通知書を受領したときであるが）。二分されたクラスはいずれも五十人に満たず、小教室での講義は静かに受けることができた。

四月下旬から夏時刻法が施行されて、まだ明るいうちから夜の授業が始まるようになったのもこのころである。

また、若き日のハンサムな独身教授、丸山忠綱先生が、さっそうと教壇に立たれたのもこのときであった。

二期を過ぎると卒論という声がチラホラ聞こえ出し、休日を利用しては図書館へ行ったり、先生の宅へ押しかけてご教示を仰いだりした（もちろん、休日には「食糧買出し」という最重要事を優先させた上で）。テーマもきまっていない学生に、先生もさぞ苦笑されたであろうと、今になって思い当たるふしがある。

そして最後の三年目は、授業のほかはその卒論執筆に集中することとなる。

当時、適当な史料が手近にあるわけでなし、書物にみえる不正確な活字の内容を確かめるべく東大の史料編纂所に数回通った。

といっても自由に閲覧可能というわけではなく、母校教授の紹介が必要であった。ミミズののたくったような毛筆の文字を目で追っていると、居合わせた親切な老教授がゆっくり読んでくださったので、それを逃さず筆記し、再び原文書と突き合わせて確かめ

るという作業をした。やがて学年試験も終わり、卒論の面接試験が行われた。先生方数人对学生一人ずつ。緊張を解くようにと言われるが、試問を受ける方はそうはいかない。矢継早の質問に、わかっているようでもなかなか答えられないでいると、担当の教授が上手に助け舟を出してくださったりした。

そしてどうやら卒業できる日がきた。昭和二十五年三月末日であった。もともと卒業証書の日付は二月二十三日となっている。悲しいことに総長の野上豊一郎博士が逝去されたのが二月二十四日との由で、その生前をしのんで卒業証書の日付を繰り上げたということである。

わが卒業証書の番号は一ケタの第四号、これは旧制文学部史学科（略称）第一期生の厳然たる証明である。四号はもちろん卒業生氏名の五十音順。日本人は、えてして四の字を忌むきらいがあるが、わが証書のそれは、歴史の史にかけ、かつ不動の四番バッターとして誇りたい。

（旧制歴史専攻・昭和二十四年度卒業）

馳け足史学生

上原 邦一

一年間で史学科を卒業する。そんな高ぶった気持で、中学校教員をやめて上京したのは、昭和二十九年の二七歳の春であった。通信で単位だけは、教職も含め百二十ほどに達していたから、通学一年と語学など若干と、卒論が必要であったからである。

上京を決めたのが、前年の忘年会の頃、一月には上京して尊敬する小西四郎先生を、史料編纂所にたずねたりした。先生から法政の史学は昼間はありませんよ、といわれて戸惑ったが、昼間は僕の所へきて勉強するがいい、史料があるからと励ましてくださった。通教事務の年輩の方は、仕事を続けたほうがいい、遅れても一二年で卒業できるではないかと危ぶんだ。だが麴町の郷党の自治寮、「千曲寮」は入寮可通知をくれた。よし上京と決めたのは二月、入試に立ち向う生徒を励まし、全員合格させ数年の務めをやめた。短気だったと後悔したのは、翌年の職探しであった。

手続きは済んでも、四月は休講つづきであった。仕方なしに東大史料編纂所に通った。小西先生は、まず読みたい資料の目録作りをせよといわれ、史料閲覧のための証明書を作って下さった。明けても暮れても、目録づくりの単調な日々が六月いっぱいくらいつづいた。

学校の講義が始まったのは、四月も下旬だったと思う。

竹内直良先生の右顧左眄^{こくまへん}なしの西洋史は、胸が透く語りであった。東洋史の河原先生は、微に入り細に入る講義で、ノートなどしない者には関連さへ忘れる内容があった。古文書学の石井進先生の解説に悩まされ、抄影を求めに品川の史料館まで出むいたりした。拓本実習は土器片で一、二回だったが、斎藤忠先生の講義は、専攻を考古にしようかと思う魅力があった。小西先生も来ておられたが、僕の話は来なくもいよいよ言われた。歯切れのいい語り掛けと、明確な資料分析を数回は、そっと片隅に寄ってノートした。熊とあだなした丸山忠綱先生は、教室を一巡しつつの講

義であった。長野市からスクリーニングに来た君と、丸山先生宅を訪問して、長野の付属小時代のエピソードなどを伺ったりした。ネオンの大学院、五三年館・五五年館と、大内兵衛総長の時代であったから、活気と新風が大学には流れていた。

二部のせいか史学研究室といっても狭く、ぼんやりと灯の点る一室で、専任教授の藤井甚太郎先生とお近付き願えたぐらいであった。夜間の講義で、終るとサッと帰られるのか、他の教授には質問したことすらなかった。ただ助手の何さんだが、ぼつねんといっただけで、何か歴史研究会に所属でもと思ったが、そんな揭示もついぞ見なかった。

宿舎の千曲寮までは歩いて十分足らず、空き時間や休講のときは、大学院へ藤井先生をお訪ねした。維新史が専門だけに、秩父事件を卒論テーマとした自分には、先生のヒントやサジェスションは有難かった。

当時はまだ自由民権期の研究が盛でなかったから、郷里の長野県佐久地方から見た事件研究などなかった。やれば何か資料があるなという、まことに無手勝流なことであった。だが自分なりに押せば、巡り合える感触は前々年の地元調査から持っていた。

本郷の編纂所へは、市ヶ谷からお茶の水まで定期券で通い、資料を閲覧し続けた。編纂所の先生方と時たま内地留学生ぐらいだったので、調査にはもってこいの環境であった。小西先生の所へは、仕事の邪魔になるから、なるべく遠慮して方向だけをお聞きに行くくらいとした。コピーなど便利な機械のなかった時代のこと、探す、ノートするの毎日であった。先生は聞くなら東大の講

義も、バスがあるからいいだろうと言ってくれたが、これは九月頃までで長つづきしなかった。蔵書の多い図書館も、研究書や論文を見るには便利であった。地下の明治雑誌文庫は、明治十六・七・八年と、新聞に片端から目をとおした。

大部抜き書きのできた九月頃からは、上野図書館へも行ってみた。学生が多く混雑して、借出しに手間どるので、国会図書館にかえた。館はいまの四ッ谷の迎賓館で、素晴らしい建物であった。

立ち並ぶ学生達を尻目に、中国室に毎日ぐり込んだ。入って資料を請求すれば、どの部屋にしようと思はれた。大理石の豪華な建物は絨毯敷の廊下で、正午は係員がシロフォンを叩いて廻るなど優雅であった。一室ごと一坪くらいのトイレなど、さすが赤坂離宮と復興期の時代だけに印象深かった。

編纂所は後半は集中して、卒論関係の調べだけにした。資料の係員から、僕も法政の卒業生と声をかけられ、頑張るようにいわれた。お茶もでるし学生食堂も利用でき居心地はよかったが、単位修得学習と卒論で、秋頃から遠のいた。たしか六大学野球で優勝した年だと思いが、日溜りの応援席でのもんぱりしたのは、一回だけだったと思う。

友人に代返を頼んで、秩父や埼玉図書館に出掛けたのもこの頃で、総理田代栄助辞世碑など拓本におさめた。秩父市内で資料探しに廻ると、刑事かなにかのように胡散顔に見られたりした。郷里に帰って、佐久側の震源地北相木村を調べても、口を閉ざす風潮があった。まだ民権激化期は、関係者には隠さざるの時期であった。長野・上田両裁判所資料も、何日か通って抜き書きさせ

てもらった。資料面では、割合と開放的な時期で、今では考えられないことでもあった。

史学研究室をたまに訪れても、二部生で仕事持ちのためか、互いに融け合う関係が乏しかった。そのため藤井先生を訪ねて、進捗状況をお話しして意見をいただいたりした。

整本したらぶ厚な卒論になった。事務局に提出したあと、新橋演舞場・鈴木・明治座などと思い切り楽しんだ。

面接は英語の読みと解釈、それに史学一般についてであった。辛辣な竹内先生の西洋史の質問には、たじたじで窮する場面もあった。途中で先生がタバコを買いにいられると、横にいた藤井先生が二つ三つ形式的に質問して、卒論のまとめで苦労したから心配ないよと、安心させてくれた。

三月に入ると郷里に帰って、再就職で学校を廻った。県の採用試験もない頃で、下旬にやっと小学校に決った。

(昭和二十九年度卒業)

思い出

松原正道

私が、法政大学第二文学部史学科へ入学したのは昭和三十一年だった。第二次大戦後十年余り、日本も国際社会に復帰、朝鮮戦争を契機に経済的にも立ち直りを見せ、次第にその地位を回復するかに見えてきたが、総じていまだ貧しかった。従って、我々学生も例外ではなく、大部分の者が生活の糧を得るために一所懸命

働かざるをえず、なんらかの形で決った収入の道を持っていた。その故かどうか分らぬが、当時、史学科は夜間の二部に設置されており、殆んどどの学生は、昼間、定職に就き、夜、大学で学ぶと言う二足の草鞋を履いていた。仕事が忙しい時、大学へ行こうとすると、「仕事と大学とどちらが大事なのか」と上司に言われた覚えがあるのは私だけではないだろう。私も、八時の始業から四時四十五分の終業まで油にまみれ機械を相手に働いた後、急いで五時半の授業に出席するべく登校したものだ。幸わい、職場と大学が比較的近かったこと、職場には多くの夜学生がおり、割合に理解があったことと、先生方が我々の立場を承知してくれていたのか遅れて始まることも多かったたので遅刻をしたと言う記憶はあまりない。

当時の仕事の関係から機械工学でも専攻すれば良かったのかも知れぬが、製造会社の経営者になりたいと言う考えが、次第に、子供の頃から興味を持っていた歴史に傾き、歴史の教師になりたいと気持が固まってきたので史学科へ進学することにした。受験に際し、幾つかの大学が候補に挙げたが、法政がその中では最も授業料が安かったと言うことが貧しい受験生には大きな魅力となった。今日、受け入れる側となり、受験生が七つも八つも試験を受け、授業料についてもあまり気にしていない様子を見て、恵まれた時代になったものだと思うされている。

入学当日、自分の大学を見せたいと父を同道、総長の挨拶を聞き、自分も大学生なのだと言う気になったのが昨日のように思い出される。大学に慣れる間もなく、クラス委員に選ばれたが、そ

れが学生自治会のものであったと分ったのは大分後になってからであった。先生方の休講、短縮授業に対し、一時限当り幾らになると計算をし、休講になると学生はその分損をするのだから、休講、遅刻をしないようにと大学側へ申し入れをしたことがあった。これは今日でも納得がゆくので、学生に時々話をするが、「先生、たまには休んで下さい」と半ば冗談、半ば本気で言われ、隔世の感を味あわされている。もっとも、昼間の疲れから授業中はよく居眠りをしたし、要求を出した自治会幹部はあまり教室で見かけることはなかった。

史学科では人数も少なく、特に、専門に分れてはいず、なんとなく西洋史に興味を持っていた私だが、日本史が多かった開講科目の大部分を受講、古文書の勉強会にも顔を出したことがあった。関野雄先生の東洋考古学、河原正博先生の東洋史、和田久徳先生のインド史、斎藤忠先生の日本考古学、日本史では和服を着用された藤井甚太郎先生、板沢武雄先生の風格ある授業、精力的な丸山忠綱先生と錚々たる先生方に教えを受けたのだなと思ひ出される。五千年の歴史に魅かれたのと、若気のいたりで、日本史よりなんとなく恰好が良いと西洋史に傾き今日に至っている私にとって、竹内直良先生の西洋史、キリスト教史は興味深かった。今日、学生と聖書を読むこともあるが、もっとあの時一所懸命勉強しておけば良かったと思っている。中村英勝先生は日本西洋史学会で毎年お姿を拝見、曾て、お話をしたことがあるが御記憶におありかどうか。

四年生になり卒業論文を書くと言うことになり、かねがね興味

を持つていた中近東の国際関係をと思ひスエズ運河について執筆、本人としてはできるだけ良いものをと必要な単位を全て取った後論文に専念すると言う理由で卒業を一年延ばしてやったのだが、結果はあまり芳しくなかった。口述試問の際、竹内先生から「一寸誤字が気になる」と言われ、特に、発展の展の字の指導を受けたことが印象に残っている。その後、機会ある毎に注意しているところと意外に間違っている人がいたので、自分だけではないと変なところで安心したこともあったものだ。奇しくも拙文を書いている今日、我が大学では卒業論文の提出日で、今後、昔の自分を思い出させられることであろう。

史学科創立五十周年だそうだが、私が学んだのは戦後の混乱がおさまりつつあった時とは言え、先生方、学生もなにかと大変であった。繁栄の世に生きていて平和の大切さを通して感じる。

最近、年とともに日本史を専攻しておけば良かったと思うことがあり、日本人を感じさせられるが、これも法政の史学科での日本史の多い授業の故によるのではなかろうかと考えている。

(昭和三五年度卒業)

思 い 出

中 野 清 徳

私は昭和二十三年四月、高等師範部歴史地理科に入學、二十六年四月史学科に編入、二十八年三月卒業の法政五年間の学生生活でしたが三十余年も前で記憶が錯綜していて定かでありません

が、思つくままに述べます。

敗戦後の何もない時代、衣・食・住、総てが不足し不便を極めた時代です。伯父を頼って上京したのに戦災でその家族で満員、住む処が無ければ通学など考えられない大変困った。漸く知人(恩人)のお世話で慈恵医大附属病院の一室に慈恵会なるものがあり、その留守番役ということでは住込むことが出来て有り難かった。次に食と言つても現在のように外食の便など殆んどなく、これも病院に頼み心配が無くなったが時には学校の帰りが遅くなり締め出され食事が出来ない事もあった。

次第に病院の先生方とも親しくなり、O先生に進駐軍専用のビアホールに連れられて行つたとき、ビールとウイナ・ソーセージなるものを戴き進駐軍はこんな美味なものを食つてののかと羨ましく思つた。学校の帰り駅前などで安酒を立ち飲みして日本人と比較し多感な当時の私には何んとも遣り切れなかった。着る物も同様、戦時中から点数制であり、一人一年間に都市部一〇〇点、郡部八〇点、背広一着は五〇点、ワイシャツ十二点など二十六年四月の廃止まで、その点数が無くなれば何も買えない。生活総てが現在の豊かな日本からは想像出来ない、隔世の感があります。

當時を思い出す資料がないかと捜したら、昭和二十六年度文学部史学科三年学友名簿が出てきた。それによると私達三回生は入学時は四十名、その中で二十五名が教諭であり他にも学校関係の職にあった人が数名居る。その名簿には教授・講師先生の名も記されている。たまたま今回戴いた「法政大学史学科・地理学科の

半世紀「記念誌の二二八頁に藤井甚太郎先生、竹内直良先生、丸山忠綱先生とご一緒の記念写真を拝見し、先生方のお声、嘉悦学園の校舎、授業中の停電等々当時が大変懐しく思い出されます。しかし今になると名簿と同級生の顔が一致しないのが、もどかしくなりません。

恩師との幾つかの思い出の中で斎藤忠先生について。卒業論文の資料を少しでも多く得たいものと焦っていた頃、先生が平泉の無量光院を発掘調査される事を聞き、無理に参加させて頂いた事がある。発掘の方法も知識も無い私を先生はよく許可されたとも思っている。発掘の詳しい事は忘れたが、先生を中心に、東北大学、地元、岩手大学の先生、学生も参加して開始された。一見小高い丘に松林、周囲は水田、こんな処から何が解明されるのか最初は全然分らなかった。測量が行われ発掘が進むにつれ敷石が現れ、土器や柱の飾り金具などが発見された。その金具を最初に発掘したのが私だったので岩手新聞？に写真が出た事など思い出深いものがある。ご承知のように、藤原三代秀衡の建立した無量光院は、宇治の平等院を模したといわれ、平等院は「極楽いぶかしくば、宇治平等院を見よ」といわれて、さながら地上の極楽と考えられた。発掘の結果そのことが実証され、平等院よりやや大型になっていて、四方池をめぐらして「浮御堂」の形をとり、秀衡自身ここに極楽往生のための絵を壁にかいたといわれるが、それは後日分ったことで、私は三日間だけ参加して途中で帰ったのだが、先生は最後の日に先生方の宿で私に夕食をご馳走して下さった事を、あの食糧難の時代にと、今でも忘れられず、深く感謝

思 い 出

している。

卒業後、郷里の新潟に帰って高校の教師になり、生徒に授業や修学旅行で宇治や東北に行った時などに、最初は何の変哲もない小高い丘が、学問を基本的に確実にやればこそ解明される、と学問することの大切さを、斎藤先生を思い出しながら話すのである。

(昭和二十年度卒業)

「学に忠なる」

川 岸 宏 教

昭和三十三年四月。藤井甚太郎先生から、近代史学会で中央大学に居るから出て来ませんかという、ご連絡を頂戴して、上京した。

前にお会いしたときの夏姿(白の半袖のカッターシャツに黒っぽいズボン、腰に手拭をぶらさげていらっしゃった)とはさすがに異なり、グレイ系統の背広を召して居られた。

自分の生得でない能力、公正に史実を取り扱う知的正直さや、誤った結論に陥らない自己批判などを、もう少し身につけるようにしたいと念願して、京都大学で国史学の研修をはじめたばかりだった。その際、先生が「学に忠なるもの」と、ご紹介・ご依頼下さったことを、小葉田淳教授から伺って居たので、そのお礼を申し述べることもできた。

国語の教師であった私を、歴史研究の方向へ向かわせる契機を

与えたのは、石母田正先生の『歴史と民族の発見』と北山茂夫氏の『奈良朝の民衆と政治』との、二冊の書物であったと思う。しかし、歴史学の門口に実際にお導きいただいたのは、お名前から一字づつ拝借して、私が、藤・沢・忠・男先生とお呼びしている、法政・通教の諸先生であった。

卒業論文のテーマを提出したとき、藤井先生は、美濃判の和野紙に、黒のカーボン紙をはさんでお書きいただいたものであろうが、片仮名まじりの長文の指導書を、やや色あせた封筒に入れて、下さった。代表に選ばれた旨お知らせいただいた丸山先生の端麗なお手紙とともに、いまま、篋底に藏している。

拙論にご講評賜り、まとめ直すようお願い頂いた。まだ神田に在った中大の大学院の食堂で、真向いに坐して、昼食をとともにした。

先生は、チキン・ライスの肉を丹念に選り分けられ、ほとんどご飯だけを、少しづつ、召し上がって居られた。胸が痛くなつて、泪がにじんできたのを思い出す。ご健勝をこそと、ここに願いつつ帰阪したものであったが、同年の夏に、先生は登遐された。

藤井先生の遺影が掲げられた『法政史学』第十一号に、恥多き卒論「楽舞史研究序説」の一部である、拙稿「伎楽史小考」を採録下さっている。省みて忸怩たらざるを得ない。

適切なタイトルをお定め下さったのは、板沢武雄先生。原稿の提出や校正など、ご連絡・ご仲介の労をお取りいただいたのは、当時助手をなさっていた、安岡昭男先生である。

丸山忠綱先生には、もっともお世話になった。若宮町のお家にも、幾度もお邪魔した。自分のところなどは、ただ乱雑に積んである感じであるが、先生のお宅では、畳の上に積み重ねられた書籍までもが、整然としているのに、驚嘆した。几帳面な性格のあらわれと拝察したが、押入の中の本まで、奥様がよくご存じなのにも、感服させられた。

昭和三十四年四月。新婚旅行の途次、東京での時間が少しとれたので、研究室に、先生をお訪ねした。西郷さんのように大きくて、しかも柔和な先生のことは、家内もよく覚えていた。先生の温顔を拝することができなくなって、もう十五年以上になる。先生を偲ぶよすがとなっているのは、お祝いに頂戴した夫婦箸である。箸は、歳月を経て塗りが剝落し新しいものと取り替えたけれど、箸筥は、今に堅牢で、食事の度に、家内とともに、重宝させていただいている。

先生が文学部長をなさっていることかと思うが、関西方面の史学科のある大学の入学案内や履修要覧を集めるよう、ご下命を受けたことがあった。また、ゼミの学生さんが、憲法十七条についての研究をされるとかで、法隆寺や四天王寺関係の教化・信仰誌に所載する文献について、参看の要があるかどうか、ご照会を受けたこともあった。

そのようなとき、法政大学や史学科の学生に対する、先生の思いのこもっている美しい文字・鄭重な文面のお手紙が頂戴できて、病氣療養中であつた私までもが、ほのぼのとしたあたたかさを感じることができ、しばらくは、明るい気分でも過ごした思い

出がある。

昭和四十五年十二月。学科増設のことで文部省へ出張したときのことと記憶するが、地下鉄銀座線の改札口の前で、丸山先生とばったり行き会ったことがある。奥様と、小学校と幼稚園くらいの男女おふたりのお子様づれであった。「お供を仰せつかりましてね」と、少し照れたように笑って仰言っていた。黒っぽいコートのポケットから出されて、まるで端坐なさっているときのように、前で組み合わされた手の、大きく白かったことが、印象にのこっている。先生にお目にかかることができたのは、それが最後であった。

クリスマス・イヴが巡って来ると、その奇遇が、学恩にお応えできなかった後悔とともに、いつも、あざやかに、甦えつつくる。

「学に忠なる」在りようを教わったのに、日は暮れて道は遠い。私方女子大学の設立に多少立ち働いただけ。藤・沢・忠・男先生にお見せできる仕事は、まだ出来あがらない。

(通信教育部昭和三十二年度卒業)

夜に集う青春群像

山 本 清 司

「若きわれらが命のかぎり

ここに捧げて愛する母校」

法政大学へ私が進んだのは昭和三十二年四月である。文字通り

思 い 出

吾が青春を命のかぎり、ここに学び捧げ謳歌した。

戦後十数年、既に戦後ではないと言われた時代であったが、日本は経済の自立も国の自主独立もまだまだ固まった時代ではなかった。一時的には朝鮮戦争で好景氣を迎えた日本も永い低成長経済を耐えていた。

東京都の小さな離島に生れた私も、島全体が貧しい中で、上京し就職するか、定時制しかない島の高校に進学するかいづれかであった。私も当然のように定時制高校に入學し、昼間ははげしい労働に耐え、夜はすき間風の木造校舎でうす暗い裸電球のもと、疲れを忘れ同級生と共によく学んだ。

なんとか上京し進学したいと思っていたが許されない悶々とした日々を送っていた。柔道の骨折を契機に私は逃げるように上京し、住み込みの職をさがし転校した。高校四年の夏である。

隅田川のはとりにある小さな石材会社の六畳間に青山学院の夜学に通う先輩と二人で住み込んだ。暗い倉庫の中のドラムかんを半分に切ったカマドで川を流れる木を拾い自炊した。冬の寒さは身にしみたが生活にははりがあった。厳しい労働ではあったが、給与が出来高制で比較的自由に休めたのでこの会社には長いことお世話になった。

新しい第一歩がはじまった。学資を親に頼ることは出来なかったので大学入學の資金づくり、進路の選択に迫られていた。

大学の決定は交通至便で学費が安く、恵まれた教授陣の法政大学を迷わず選んだ。大内兵衛総長を擁し、建学の精神「自由と進歩」の氣風が脈々と流れていたからであった。

仕事から解放されて、四季おりおりの自然、桜並木の外壕公園を大学に急いだ。講義は五十五年館・五十八年館を中心に古くなった六角校舎や図書館も利用し、体育などはお壕の向うの市ヶ谷校舎にも足を運んだ。嘉悦学園上の東校舎にも二年以降研究会の部屋に毎日のように通った。

西郷隆盛のように精悍でエネルギーな丸山忠綱先生の日本史概説・演習・特講、特に「吾妻鏡」の講義は予習復習が充分出来ない私にとって冷汗の連続であった。早く逝かれたことが惜しまれてならない。

東洋史の河原正博先生、西洋史の竹内直良先生、そして三、四年になって「日蘭文化史」で有名な板沢武雄先生も加わり深い学問研究と人間味あふれる講義は思い出深い。

学外からも学会をリードする第一級の講師がやってきた。明治維新史の小西四郎、地方史の児玉幸多、日本中世史の笠原一男、日本考古学の斎藤忠、東洋考古学の関野雄、古文書学の佐藤進一、各先生方の講義も熱心に受けた。専門部での講義は星間の疲れも忘れ身が入った。講義に燃えたのは私だけではないだろう。史学科のいや二部法政の全ての学生が、学ぶ喜び学問研究の深さと生きがいを感じたに違いない。

学生生活の思い出の中に二部「歴史学研究会」の記憶も鮮然に残っている。封建史部会に属していた私は研究会で先輩と口角沫を飛ばし論じあい、かつまた勉強もした。代表委員としての会運営や、大学祭をはじめとする諸行事の実施は厳しく苦しいものであったが、そのプロセスで視野を広げ、人間的に大きく成長させ

た。

マルクスやレーニン、毛沢東の文献も必要にせまられて目を通して幅広い専門書も読んだ。六十年安保の樺美智子さんが圧殺されたその夜も国会周辺のデモに参加し革命前夜のような異様な光景の中で緊張感と焦燥感に怯えていた。その前後も度々デモに参加した。

学部やサークルを通し私は多くの先輩・後輩・友人を得て彼らから学んだ。私のまわりのほとんどの学生がそれぞれ苦労しながら自立し、そして生き生きと夜の法政に集い、学び、語り、想いの情熱を傾けて青春を謳歌していた。

教授陣も学生達も、そこには「自由と進歩」「進取と質実」の気風が脈々と流れていた。

今私は都の職員として勤めた小・中学校をやめ新島本村の教育長として四年目を迎えている。大学を卒業して二十七年目である。

この間、日本の経済は飛躍的に発展し、先進諸国の中でも一、二の経済力を持つに至った。しかしその反面物の豊かさの中でいろいろなひずみがかえ日本は病んでいる。今私は二十一世紀を背負う青少年の育成に心血をそそいでいる。

思えば私達の青春時代は決して物質的には豊かではなかったが、しかし私はハンダリーだったからこそ激しい労働に耐えながら八年間の夜学に、講義やサークル活動に、熱き情熱を燃やし、充実した日々を送ることができた。そして「進取の気象・質実の風」法政大学のバックボーンは今も私の中に脈々と生きている。

母校法政大学の後輩諸君が二十一世紀に活躍できる「青年日本の代表者」たらんことを祈ってやまない。

(昭和三五年度卒業)

史学科の思い出

丸山 朝光

昭和三十六年四月、歴史学を学びたいと言う強い志を持って、史学科に入学、以後四年間に亘る史学科での学生生活が今日の私を形成していると言っても過言ではないのである。当時史学科担当の教授陣は各専門分野で活躍目覚しい先生方で構成されており、何れの講座も密度の濃い充実した授業が展開されていたため、学ぶ立場としては常に学習意欲を刺激されると同時に、日々の授業が満足感に満ち溢れていたことを、昨日のことの如く思い出し感銘しておる次第である。そこで次に史学科在学中に履修した講座の中から、特に印象深く思い出される講座について記してみたい。

日本史関係では、斎藤忠先生担当の「日本考古学」において、縄文・弥生時代から古墳時代に至る日本考古学の変遷とその研究法について、遺物や遺跡の種類を挙げながら進められた授業は、ただ講義のみに止まらず、拓本の作り方からタンポの作り方まで、懇切丁寧な指導を頂いたことは、未だに印象深い思い出として記憶に残っている。受講生常時三名と言う特異な存在の講座でもあった。先生著「日本古墳の研究」は最良の参考文献であった。

思い出

た。笠原一男先生担当の「日本仏教史」では、源信の「往生要集」や、真言・天台宗、末法思想、法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、道元の曹洞宗、日蓮の日蓮宗等の仏教思想について、歴史的背景と併せて開祖の人物像の紹介や悪人正機説等、豊富な話題を挿入しながら展開された講義は、さながら人生哲学の真髄を聴く思いで、次回の講義が待たれたものである。岩生成一先生担当の「海外交渉史」では、切支丹宗門、天承・慶長のローマ遣使、日葡・日蘭・日英貿易史等の対外関係史について多数の参考文献を紹介しながら進められた授業は、当時の日本人と西欧人の関係が克明に描かれており、大変興味深かった。

東洋史関係では、関野雄先生担当の「東洋考古学」において、周口店遺跡の発掘、仰韶文化(彩陶)、竜山文化(黒陶)、殷墟の発掘(甲骨文字の発見とその解説について)等の中国考古学について、先生ご自身の実証的研究成果に基づく授業展開は圧巻そのもので、忽ちこの講座の魅力の虜となり、東洋考古学専攻コースがあれば、その道に進みたいと真剣に考え込んだぐらい感化された講座であった。難解な考古学を先生の温和な口調で平易に理解させて頂いたことにより、中国史に対する興味が著しく向上したことを覚えている。先生著「中国考古学研究」「世界考古学大系(6)研究法」は最良の参考文献であった。河原正博先生担当の「東洋史演習」では、司馬遷の史記「南越尉佗列伝」の白文を教材に用い、漢文読解を伴う大変厳しい演習であったが、この演習で漢文読解力が身につく、また「史記会注考證」に出会えたことは、大きな収穫であった。周藤吉之先生担当の「中国経済史」では、土

地制度、税制、役法等について、各々史料を引用しながら解説がなされ、さながら史料制度史の観があったが、理解が進むにつれて興味を覚え、早速先生著「中国土地制度史研究」を取揃えたことを覚えてゐる。

西洋史学関係では、清水博先生担当の「アメリカ史」で、植民地の開拓、連邦・州権主義の対立、議会制度の成立、経済発展と対外関係等の歴史的諸過程について、先生ご自身の研究成果を踏えての合衆国成立発展史の授業は、日本の近代史とも重なるところがあり、興味をそえられる講座であった。「原典アメリカ史」が最良の参考文献であった。金沢誠先生担当の「フランス革命史」では、アンシャンレジームから革命の勃発、革命の進行と議会の変遷、革命期に登場して目覚ましい活躍をした多数の人物とその活動状況について、具体的な解説を加えながら進められた講義は、革命史の一大総巻を見る心地で拝聴したものである。ロベスピエール、マラー、ダントン、エベール等の人物像は未だに記憶に焼き付いている。河野健二著「フランス革命小史」、桑原武夫著「フランス革命の研究」は最良の参考文献であった。なお他にも思い出に残る講座が多数あるが紙面の都合で割愛する。

史学科における四年間を顧みると、史学専攻の学生数が少なかったため、学級の稠まりもよく、また授業もマスプロ化せず、先生方と学生間の触れ合いも親密で、大変居心地のよい雰囲気の中で過ごさせて頂いた。空時間には気分転換をかねて靖国神社の境内を散策したり、千鳥ヶ淵公園にも足を伸した。また大学図書館では資料が足らず、国会図書館に通って、マイクロフィルム資料

のコピーを依頼したことも度々あった。先生方の個性に富んだ学究的な講義を受講するのが何よりも楽しみで、毎日期待に胸膨らませて外濠公園の木立の中を大学目指して通ったものである。よき師よき友に恵まれた学生生活であったことを思い出し、心より感謝しておる次第である。

(昭和三九年度卒業)

思　い　出

伊　藤　勲

春、四月。

桜の花の咲き匂う外濠の道を通って、大学に言い始めた。クラブ入りを勧める華やいだ叫び声。それは今を去る二十二年前、昭和四十年のことである。

二年になった。史学科の学生委員選出の話があったとき、すぐさま、名乗りをあげた。史学会の手助けをするのがその任であった。こうして、研究室に出入りを許されることになった。

史学会の例会・大会は年に二回開催されたが参加者は約四十名であった。土曜日の午後、研究発表が行われ、夜、懇親会が開かれた。先生方の御挨拶・お話はいつも控え目であった。日曜日には史蹟見学があった。金沢文庫、恵林寺、足利学校などへ行った。薄暗い建物の中で大切に保存されている古文書というものを初めて見た。懇親会でも、史蹟見学の折でも、なかなか先生方と話を交すほどの勇氣は出なかった。先生方が高い教壇からわれわ

れ学生の傍まで降りてこれ、親身になって話をしてくださったことには時が経つにつれて、温かく、ありがたいという思いが募ってくるばかりである。

さて、講義と先生の思い出を綴ろう。斉藤忠先生の「日本考古学」、関野雄先生の「東洋考古学」、中村英勝先生の「西洋近世史」、岩永博先生の「近東史」その他興味をそられる専門科目が多く、努めて沢山の科目を受講したが、ここでは特に印象の深い先生方について語ろう。

安岡昭男先生からは「明治維新史」を教えて戴いた。卒業後、吉田松陰、坂本竜馬、西郷隆盛、勝海舟、伊藤博文など維新の志士が身近なものになった。

丸山忠綱先生からは「日本史概説」、「史籍解題」をお教え戴いた。滔々たる御講義には常に目を見張る思いであった。私どもの卒業後、不幸にして、お亡くなりになったが、私の脳裡からは若々しく、大きな声の、お元氣な御姿が今も消えない。

岩生成一先生からは「南海貿易史」を教えていただいた。鄭成功の話。お話が速く、必死になってノートをとった。卒業後、「南洋日本町の研究」を購入した。また、カード作成のお手伝いをしたことのある「日本人物文献目録」を見つけ、買った。

河原正博先生からは「東洋史概説」を教えていただいた。ある時、講義が終わると、先生は「伊藤君、文化大革命を研究してみないかね」とおっしゃられたことがあった。また、二回ほど、中国人のスケールの大きさ、偉大さについて話をされた。これについては、後年、在インドネシア共和国日本国大使館で三年半は

ど、華僑の若い学生諸君に日本語を教えることを通して、実感をもって知った。卒業して、かなり過ぎてから、「漢民族華南発展史研究」を入手した。

竹内直良先生からは「西洋史概説」、「キリスト教史」をお教え戴いた。ピサの斜塔に上られたり、ローマのカタコム(Catacomb)に入られた話を伺った。また、ある時、史料のマイクロフィルムを購入した、と言われ、実物を見せて戴いたことがある。先生は「ある人が、大学を出たということが苦しい時の心の支えになった、と言っていた」と言われた。卒業式は四十四年三月二十二日、武道館で行われたが、その後の謝恩会で先生は「星影のワルツ」を歌ってくださった。卒論の指導教授竹内直良先生には卒業後、何回も目黒区鷹番のお宅にお邪魔をし、いろいろお教えいただいた。

今度は同期の友のことを記そう。

卒業の年の一月、私は本館地下のテレビで安田講堂での、全共闘学生と機動隊の攻防戦を見ていた。その後、しばらくして、史学科では「おもいで」という名簿を作った。同期生はちょうど九十名(全員)。卒業後、十八年以上過ぎた。今年、一九八七年十一月二十一日(土)の、赤坂プリンスホテルでの史学科・地理学科創立五十周年記念祝賀会で戴いた名簿では、同期生のうち、住所が載っている者は四十六名である。同期生の半数の住所が把握できなくなってしまうていた。先日の祝賀会には、石井正敏・仙石鶴義・新城敏男・桑室一之・小山智恵子・岡田信子・佐野峰知子・峰尾公子・山田綾子さんほか、私も入れて、十二名が出席し

た。一年先輩の方々と私の知っている人は四名であった。歳月は人を離散させる。

卒業論文は「ペリクレスに至るアテナイ民主主義の発達」であった。高校の時、「プルターク英雄伝」（高橋五郎訳）を読み、深く感動していたことと、現代世界の源流の一つである古代ギリシアの民主主義を検証しようという動機がこのテーマとなったのである。ヘロドトス、ツキジデスを読み、アリストテレスの「アテナイ人の国制」を読んではアテナイ市民の喧噪を確かに聞いた、と思った。勤務先、国際学友会の面接試験の時には、竹内直良先生がわざわざ、出向いてくださった。暇な時にはトインビーの「歴史の研究」を読んでいたが、ある時、「歴史意識」が育っていることに気がついた。

法政大学史学科及び史学会は実証的研究の学風を守り育て、成果を挙げてきた。卒業生は先生方の温かいまなざしを背後に感じながら、研究や教育、そして出版方面に確固たる地歩を築いているばかりではなく、多彩な分野に進出している。私は創立五十年の歴史を持つ、法政大学史学科の卒業生であることに誇りを感じている。そして、今なお、歴史学という学問に愛着と尊敬を懐いている。

法政大学史学科の、今は老いられた恩師に限りない感謝と尊敬の念を深めている。また、卒業生のみなさまがたの健闘ぶりを知っている。最後になってしまったが、現史学科の先生方、学生のみなさまとの交誼が結ばれ、深まることを願いつつ、筆を擱くことにしたい。

修士論文テーマとの出会い

安達 満

四十歳にして大学院に学ぶことになったのは、Uターンによる帰農生活が契機だった。生涯学習の課題を郷土史のなかに求めようとしたのは、村上直先生が甲州をフィールドとして近世初頭の徳川氏に関する一連の論考を発表されていたことにある。徳川政権成立に甲州系武士の係わりが大きかったことを追求したものであり、家康の甲斐経略と武田遺臣のこと、大久保長安を中心とした徳川政権内における旧武田家臣団の動向などは、徳川政権下における代官の研究を前面に押し出してくる素地となっていた。当時としては甲斐郷土史研究のなかには見られない斬新なテーマの選択であって、甲斐の歴史のなかにこうした研究素材が埋れていることに大きな刺激を受けたものであった。その刺激を土着の地方研究に視点を置いて自からの修士論文のテーマに具体化するには、基礎学習があまりにも貧弱であった。

漠然とした近世の地方の研究意識のなかに焦点を見出したのは古島敏雄先生との出会いにあった。先生は丁度東大を定年退官され、豊田武先生の要請により、四十八・四十九年度の二年間の約束で法政大学に來られたと聞いた。履修要項に書かれた歴史地理の講義要旨は、近世の開発の進展は治水技術の発達と係わっており、その具体的な姿を甲州の甲府盆地における金無川・笛吹川の

治水の経過のなかに求めることを目的としていた。山梨の素材に着目した講義は私にとって期待するところが大きかった。

具体的な研究に入る前に「地方書にあらわれた治水の地域性と技術の発展」（日本思想大系『近世科学思想上』）について講義を受けた。特に地方書からみた治水技術の歴史性については、すでに『近世日本農業の構造』において「近世農業の技術的様相」の一つに治水技術の発達としてとりあげていることを、先生より教えられ、安易な読書姿勢を自戒したものである。時には先生のお宅に院生が招かれてポトルを空けながらお話を伺った。素朴な身近かの疑問から歴史の研究テーマを得ること、歴史を史料に語らせること、歴史理論の展開は具体的事例をいかに一般化するかにある、など有意義なお話はその後の自分の研究方法の基本としている。

さて、古島先生と大学院生で山梨県立図書館郷土資料室を訪れた時の具体的な研究課題は次のようであった。

甲府盆地の特に釜無川・荒川・笛吹川の三河に囲まれた地帯は、昭和の初期には全国で最も高い米の生産地帯であった。ここがそうした耕地となるには武田時代より三河のとりわけ釜無川の治水によっている。それゆえ、その耕地の開発の歴史を把えれば釜無川の治水の発展過程を知ることができるはずである。それを知る具体的方法として、耕地の開発の歴史を追求するために、同一地域内における異なった時期に実施された検地の成果を比較する。そして、具体的に土地に刻まれた開発の進展状況のなかに、享保期以降に連続堤で川を締め切った狭めた河川敷内に洪水をと

じ込めようとする以前の治水技術の姿、すなわち、「百姓伝記」の二重堤や「地方竹馬集」の洗堤に対応するカスミ堤によって守られた耕地の段階の姿をとらえる、というものであった。しかし、県立図書館で慶長検地帳と貞享検地帳の小字と耕地面積の書き出しによって得られた結果は、ほとんどの村の小字が不連続のため開発の具体的姿をとらえる成果は得られなかった。

山梨の住人が山梨の研究素材を失っているものか、という決意に燃えながら基礎作業に取り組んだ。それは既に刊行されている慶長高と宝暦高の村高の比較から甲府盆地の村々の開発の進展状況をとらえてみようとしたもので、盆地低地部の村は石高の増加が低く、すでに近世初頭で頂点に達していることを示していたが、そのほかに釜無川沿岸の村々とかつての釜無川河道と思われる方向に石高増加の多い村々が帯状に連なることを発見した。盆地低地部のうちに近世初期に開発の進んだ村々に囲まれて早くから安定した地域があることを報告した段階で古島先生は法政を去られた。その折、他の素材が得られる地域との比較による研究、年貢割付状に記される水損等による引方のなかに水害の状況を読みとり、特定の場所が恒常的に被害を受けたり、被害地の変化の様子から治水工事の変化を相定することなどを御教示いただいた。

それから一年「釜無川治水の発展と国中平野の開発」を修士論文として完成させるまで、頭が最も回転した時だった。治水に関して郡中割金制度、村上ゼミでは口米制度、埼玉県立図書館調査での地頭賄のことなど一緒に出来あがったはずである。歴史研究

は問題意識を持てば縫れた糸を解くSF小説のような楽しみがある。これも古島先生の言葉である。

(昭和三四年度卒業・昭和五〇年度院修了)

大学院時代の思い出

平澤 (旧姓岡田) 信子

大学院の六階にあった岩生成一先生の研究室に、私が初めて伺ったのは、大学三年の秋、昭和四十二年のことであった。四年進級を控え、そろそろ卒業論文のテーマを決める時期にさしかかり、先生に相談に伺ったのである。

当時の先生の研究室は西日のあたる、夏は大変暑い部屋であるが、私にとっては、史料と本に埋れた宝の山のようなものであった。日英交渉史を卒論のテーマにした私には、先生がイギリスで調査してこられ、タイプした原文史料をはじめ、目を通さねばならないものに満ちていた。ダンボールの箱に入った原文史料は、語学力不十分の私にとっては、読みこなしていくのが大変であった。今とはちがいが、コピーは旧図書館三階に一台だけ、しかも学生にとっては高価であった。あとはひたすら筆写するしかない。必要と思われる部分を抜き書きし、意訳・誤訳をまじえながらも、必死にがんばったものである。以来二十年、不出来な教え子であったが、今に至るまでお世話になっている。

その間、印象にのこる思い出としては、大学院入学直後の、紛争によるロックアウトがある。封鎖中も講義は休むことなく、お



豊国廟の前で岩生成一先生と共に (昭和49年10月30日)

互いに電話連絡をとりながら、場所を求めて続けられた。喫茶店で、また岩生先生のご自宅で講義がなされた。回りを本に囲まれ、講義中すぐ手にとれるという、学生にとっては願ってもない環境であったが、大変ご厄介をかけたと思う。その後、三田のお寺の一室を借りることとなり、和室で細長い机を囲んでの「寺子屋」授業を行うこととなった。黒板がわりの模造紙を数枚と、サインペンを用意して授業開始であった。この時もやはり、岩生先生の「ちょっと大きな目のカバン」からは分厚い本が何冊かとりだされ、講義の間に廻された。六時から始まり九時頃終ると、昼間仕事をしながら通学していたこともあって、いささか疲れを覚えたが、気持は充実していた。

やがて大学封鎖も解け、大学院棟二〇四番教室での授業が再開されると、一同ホッとしたものである。学内には、紛争後の落ち着かぬ雰囲気のがこっていたものの、久しぶりの外堀公園の行き帰りに感慨を覚えたのは、恐らく私だけではなかったと思う。

大学院修了後も講義にださせていただき、『異国日記』を読んでいた。講読していた学生で、原文書を調査すべく京都行きを計画し、昭和四十九年秋に出かけた。京都では、金地院をはじめ、清水寺・豊国廟を訪れ、博物館で『異国日記』を調査した。この時の岩生先生の健脚ぶりには「一同脱帽」であった。奈良では天理図書館を見学し、先生の解説をうけながら、資料を見せていただいた。大変ぜいたくな「修学旅行」であったと思う。

数えてみると十年近い間、市ヶ谷へ通ったことになる。後半は仕事をもち、家庭を持ちながらであったので、思うことの十分の

一も果せなかったが、私にとっては充実した年月であった。

(昭和四十六年度院修了)

大学時代の思い出

―丸山忠綱先生を中心に―

藤 本 孝 一

私は法政大学に十八歳から三十歳まで、十二年間在学した。二十代全部を、法政と共に過したのである。

その間、七〇年代の安保闘争・大学紛争の時代であった。この混乱期にあって史学科は、丸山忠綱先生が文学部長となり、紛争と対峙され、終に斃れた。史学科の永い歴史の中で、最大の危機であったろう。

一時期、史学研究室を預っていた私にとって、先生について語れることは、史学科の状況を物語るものである。

教養部の時は、一般の学生にとって高校の復習みたいなもので、退屈であった。両親は浪人することを許さなかったので、法政へ入ったが、私は他大学へ受験しようと考えていた。全く授業を等閑にしていた。処が、教養部の歴史は丸山先生が担当されていた。私は唯一、先生の講義に引き込まれた。先生は授業が終ると、すぐ水飲みに行かれた。私はその後からついて、飲み終わるのをまって質問を繰り返した。もうその頃には、他大学への受験の心持も消え、先生の教え子と成ろうと一杯の気持であった。

先生の風貌は、九十余キロの巨軀と一度も怒ったことのないに

こやかな顔であった。その学識は、博覧強記、諸事一般に及んでいた。論文においても、奈良時代の壺田永世私財法から江戸時代の石川島人足寄場に亘って発表されている。

大学紛争の真直中に入り、大学が中核派の拠点校になると、大学全体が昏迷の極にあった。誰もが嫌がる紛争中の文学部長に昭和四十四年六月に就かれて、その解決に当られた。暴力の横行する中であって、愚痴一つ言われず、大人の風でもって、堂々と行動されていた。

昭和四十五年春、先生から私へ史学研究室に勤める様にと言われ、研究室を預ることとなった。紛争にあっても、法政史学は刊行しつづけた。私も研究室の充実を計ろうと思ったが、予算がない。思い立ったのは、法政史学と他の雑誌との交換を今まで以上にすることであると。法政史学は年一回だけの発行であるが、交換先へは自動的に文学部紀要が寄贈されていた。そこで、年二冊として、各機関へ申し込んだ。最も成功したのは、月刊誌の日本歴史・古代文化であった。二冊対十二冊、海老で鯛であった。勉強する者にとって、最新の情報である雑誌が多数ほしいのである。歴史のある当史学研究室は、古くからの雑誌を架蔵しており、他大学より雑誌を閲覧に多くの研究者がみえられた。

丸山先生は、その年の冬休みに入っていた十二月二十五日の夕方、研究室にこられ、これから家族と待合せて食事する、では良い正月を、と言われてその後姿をお見送りしたのが、研究室での最後の先生であった。

翌年一月五日、急に杉並の河北病院に入院されてから逝去され

る五月八日まで、一歩も病院から出られなかった。手術をするため多くの学生が献血に集まった。紛争中であっても、先生の人物の篤さに感銘した。私の修士論文も病床の中で読んでくださり、代りに主査に成っていただいた岩生成一先生へその判定を書いてくださった。岩生先生は、自分宛のその手紙を私にくださった。今も大切にしている。読みかえすたびに、私の怠惰な精神へのカソフル剤となっている。

海外交渉史の大家岩生成一博士を法政大学へお招きしたのは、丸山先生であり、中世史家の大家豊田武博士をお招きしたのは、村上直先生と仄聞している。

紛争の混乱の真最中であって体験した私にとって、紛争を乗り越えた先生方によって、現在の史学科の盛華を迎えているのは、夢のようであり、慶びである。

（昭和四二年度卒業・昭和四九年度院博士課程単位取得）

学生・大学院生の頃の思い出

池田昇

現在、私は日の出町教育委員会社会教育課社会教育係に勤務し、町史編さんを担当している。とはいえ、社会教育を手伝い、文化財関係の仕事も兼務しながら、編さん事業を進めている。ここに至るまでには、大学生・大学院生時代の勉学と経験が多少なりとも生かされているといつてよい。

思うに、私が法政大学文学部史学科に入学したのは昭和四十五

年四月であり、あれから実に一八年を経過している。ずいぶん長いものである。

史学科に入ったとはいえ、一年生の頃は歴史というものにまったく興味がなく、全般的な勉強をしていればそれでよいと思っていた。しかし、二年生になり、当時の近世文書講読会（現在「近世文書研究会」）に入れてもらい、歴史を学ぶ気持ちになった。きちんと勉強していくには原史料を読む必要があると自覚したからである。

あの頃は学園紛争が尾を引き、また、史学科の大黒柱であった丸山忠綱先生が亡くなられ、授業は平常どおりに行われていなかった。休講もかなりにのぼった。

西洋史・東洋史・日本史の概論は二年生から始まるが、とくに日本史概論は、丸山先生に代わって安岡昭男先生と村上直先生が教鞭をとられた。このとき、日本近世史の村上先生に初めてお会いした。この出会いは近世史を専攻するきっかけとなった。

前にも述べたが、大学では紛争が長引き、歴史を学ぶには授業外での場合が多かった。研究会たとえば「近世文書講読会」で身についたものが多々あった。この会は週一回、授業外に原史料の講読を中心しながら歴史研究を行った。また、夏には集中学習といえるような形で合宿が組まれた。

長野県小県郡和田村での合宿は、二年生から四年生にかけて、原史料の字を読む能力を養う学習会であったといえる。ここでの合宿でようやく字が読めるようになったといえるのではないだろうか。四年生の夏には、八王子市川口町の法蓮寺でも合宿が組ま

れた。これは八王子・多摩地域を知ろうというものであった。この以前、三年生のときから八王子には見学会があり、三年を終えるころ、卒業論文のテーマが決まった。それは「八王子千人同心の動向」であり、自分なりに一生懸命研究し書きあげたつもりである。

四十九年四月からは大学院の修士課程に進んだ。ここでは立派にも四年間も在籍してしまった。おこがましいことであるが、この頃からは教えられるだけでなく、ある意味では指導の立場へもまわった。

西多摩郡五日市町で合宿し、山梨県の勝沼町でも合宿が組まれ、当地の史料を読んだ。このように、合宿は地域的広がりをもつに至ったのである。また、大学院の授業の延長として「地方」の学習が大事であるという目的のもとに、秋川市二宮と同市雨間でも合宿が実施された。この頃には、多摩地域の特色を学ぶという動きが最高潮に達したといえる。しかし、自分自身については、残念ながら掘り下げて研究してみるというところまでには至らず、悔やまれてならない。

五十三年四月、博士課程に入った。この年から村上先生が編さん委員と近世部会主任である栃木県小山市史を手伝い、主に交通史をテーマにした。このときも合宿を行い、対象は近世史専攻の大学院生・学生であった。炎天下、一人であるいは学生といっしょにグループをつくり、史料を探しまわったあのときの苦勞が浮んでくる。

五十六年三月は最後のときであった。千葉県鴨川市で文献学習

を兼ねた合宿を行った。これは近世史専攻の大学院生のみ参加であった。暖かいはずの房総も、あのときはあいにく風が強く雨もよりの寒い日であった。学生生活の最後であり、おりしも荒波を見て、世の荒波に立ち向かっていけるであろうかと思つてみた。

再び話を現在にもどそう。学生の頃の勉学・経験は、たとえどのような職業に就いても応用する形で生かすべきである。私は近世史の専攻であるが、仕事柄、ほかの専攻分野あるいは全体の事務的な仕事をしなければならぬ。当然のことながら、自信のもてない部分が多数あつて悩まざるを得ない。しかし、怯むことなく、未知のものにぶつかり、経験を生かして事を成就するように努めている。

今は秋川市に住所を移した。仕事あるいは仕事以外で八王子市・秋川市の郊外を通るとき、合宿したあたりのことを考えると、懐しく思えてくる日々である。

(昭和四八年度卒業・昭和五五年度院博士課程単位取得)

大学時代の思い出

清水久夫

高校生のときから、大学では歴史を勉強しようと思つていた私は、一九六七年四月、法政大学の史学科へ入学した。当時の法政大学は、およそ勉強しようという気を起こさせる環境にはなく——はかの大学も似たりよったりであつたようであるが——かなり

絶望的な状況にあつて、やがて授業も行われなくなり、私も全く勉強をしなくなった。長い休校の後再開された授業へもあまり出席せず、そのため一年生のときにはほとんど単位を取得できなかった。それでも自動的に二年生に進級し、授業へ出るようになった。しかし、あいかわらず、長い休校期間があつた。

三年生になった頃には、ほぼ正常に授業が行われるようになり、私も「初心」にかえり、勉強を始めた。その年、村上直先生は、兼任講師として法政大学で講義を受けもたれ、私はその授業には一度も休まず出席した。ほかに、佐藤進一先生、兄玉幸多先生、それから一昨年亡くなられた石母田正先生の授業・授業にも「皆勤」したように思う。授業に出るだけではなく、その先生方の著書、論文も読んだが、今考えてみると、どの程度理解できていたのか疑問ではあるが、それでもいっしょうけんめいに努力はしていた。

四年生になったとき、豊田武先生が兼任講師として法政大学で講義を受けもたれた。私も先生の授業に出席し、先生の御自宅で卒論の指導を受けた。そのときの私には、「基礎学力」とよべるようなものがほとんどなかったといえよう。いくらいっしょうけんめいに勉強したつもりでいても、「独学」に近く、まだ実力不十分で、それを指導された先生の御苦労は、たいへんなものであつたろうと思う。

それでも、豊田先生の御指導のおかげで、無事卒論を提出することができ、大学院への入学も認められた。私が、豊田先生というすぐれた指導者を得ることによって、本格的な中世史の勉強を

始めたのは、そのときからであったといえよう。大学院へは、修士課程、博士課程合わせて七年間在学した。

大学院生活で思い出にのこるのは、年に数回行ったゼミ旅行である。そのときに、いちばん積極的でいつも先頭に立って私たちを引っばっていったのが、豊田先生であった。この旅行では各地で貴重な資料を数多く見ることができ、今私自身の重要な財産となっている。私が何度かこの旅行の幹事をつとめたのも、よい思い出となっている。

私が七年間在学した大学院を去る直前、豊田先生が急逝された。あまりにも突然のことで、かなりショックであった。先生が法政大学の教授に就任されたときと、私が大学院へ入学したのが同じであったため、私の大学院時代は豊田先生が法政大学教授としておられた時期と一致していた。先生がなくなれたことによって、私はもう豊田先生の御指導を受けることはできなくなってしまうが、法政にはほかにも教えをうけたすぐれた先生方がおられ、またよい先輩にも恵まれている。

私は、いくつかの博物館を経て、現在世田谷区美術館の学芸員となっているが、作品の貸借、あるいは学芸員の研修など館どうしの交流は多いが、そのさい博物館、美術館の学芸員に、法政大学史学科出身者の多いことには驚かされている。これも、先生方や先輩方の御努力によるところが大きく、史学科のつくりだしたひとつの大きな実績として、誇ってよいことと思う。博物館、美術館は、余暇の増加、社会教育の重視という近年の傾向のなかで、今後ますます社会的に大きな位置を占めるであろうことは間違いない。

思 い 出

ない。世田谷美術館など、新しくできた美術館の活動をみてみると、その変化がよくわかる。それにともない、館運営の中心となる学芸員の役割もさらに重要となってきた。そのようななかで、学芸員の力量が試され、大学で何を学んできたかが問われることになる。法政大学で、先生方や諸先輩方にお教えいただいたことを、今後も大事にしてゆきたいと思う。

(昭和四十七年度卒業・昭和五十四年度院博士課程単位取得)

近代史文献講読会のころ

岩 壁 義 光

十二月初旬、大学・大学院時代の思い出や史学会の活動ぶりについて「外から見た」実感を書いてほしいとのご依頼を受けた。その「外から見た」という文面を読みながら、私がすでに卒業者・学外者であったことを改めて実感している自分自身、実は本当に驚いていた。私にとって大学院生活そのものであったような法政大学史学会との関わり。したがって、ある意味では学生生活の延長のような現在の生活が、自分の意識の中に、時間的断絶を経ぬまま、時間を越えて過去を平行移動させ、私にこの「驚き」をもたらしたのである。そうした私が、思い出や活躍ぶりについて語ることが適切か否かは別として、思い出すまま、学生の頃を振り返ってみたい。

私が大学に入学した昭和四五年頃は、学園紛争の嵐のような時代であった。私にとって史学会は飽くまで大学院生活であり、大

学生時代ではない。授業を中断するアジ演説や討論会、教育大生殺人事件に端を発した長期のロックアウト、行なわれない授業と試験、私には学園祭の記憶も少ない。しかし、なぜか大きな不満はなかった。「さぼりたい」という気持ちからではなく、「時」というか何かが動いているという実感があった。だが、次第に他大学の紛争が終息してくると、うちの大学ではこんな事をいつまで続けて行くのだろうかという気持ちになってきた。そうした「日和味」的な自分に苛立てば苛立つほど、同時に強烈な知識欲が自分を襲うようになった。他大学に移ろうかと考えたのもこの頃である。こうしたある日、安岡昭男先生から『蹇蹇録』講読会へのお誘いを受けた。いま考えると、このお誘いが史学会との積極的な関係の第一歩であった。安岡先生を中心に、当時のメンバーは濱徹夫君ら四、五名。私より年下で、すべて各クラスの史学会委員であったと記憶している。毎週開かれる講読会は輪読と問題点を互いに出し合いながら、私は彼等と接する内に、自分の知らなかったもう一つの学生生活を知り、このことが後日の進路を決める要因の一つになった。それほど、この講読会の意味は私にとつては大きかった。

講読会の中での興味と知識の共有経験は、大学院進学後に多くの後輩との関係をつくり出した。私は、大学院進学後直ちに史学研究室のお手伝いを命じられ、以後ドクター進学後、職に就くまで研究室に勤務した。この研究室時代、日本史概説を担当されていた伊藤玄三先生から、学生の中に近代史専攻の希望者がおり、研究会があれば参加したい旨の申し出があったので、私にその研

究会を開けというのである。その「御達」に従い、近代史研究会を開いた迄はいいが、自分の力不足は如何ともし難い。そこで思いついたのが遠山茂樹先生の『明治維新』をテキストにした維新史研究であった。当時社会科学部政治学を教えていたいた遠山先生の御著書なら、問題が起った時点でその都度質問して解決していける、と考えたのである。こうして始まった近代史研究会は、ある時期は近代文書講読を、ある時期は日本資本主義論争をテーマにして、その後参加人数を次第に増やしながらか、当然の事ながら好むと好まざるとに拘らず、このメンバーには膨大な研究室雑務を手伝っていただいたことをいまでも感謝している（もともと「岩壁先輩は人使いが荒い」との噂は否定できない）。

今は研究機関や教育機関に職を持つ大学院時代の先輩や後輩との関係が、情報交換などを通じて一段と緊密化している一方、当時とは比較にならないほどの情報量を持つ私の所には、他大学の学生が多くの疑問を持ち込んで来るのに対し、法政大学史学科の学生が一人も訪ねてこないのは何故であらうか。かつて一人米国で冬を過ごしていた時、プリンスストン大美学専攻のOBと在学生が博物館に懇親会を兼ねて集まり、大討論を行なうのを見て、強く嫉妬を感じたことも今も痛烈に思い出す。

ところで、不勉強のまま研究室に座っていると思ってもよらず勉強になることが良くあった。

当時私がテーマとしていた日本の南進政策について論文を発表した時に、突然、故豊田武先生から次のような厳しい主旨のご指摘を頂いた事がある。

歴史を理解し研究していくには、広い視野と多様な思考を持たなくてはならない。一つのテーマ、一つの見方は研究を深めることは出来るが、歴史家を志す以上はその守備範囲を必ず広く持たなくてはならない。そのことが将来に互っては歴史の理解を深める源になる。私は中世史の専門家だが、近代史の論文を発表したこともある。それがすべて良いとは言わないが、君は現状に満足せず、少なくとも近代の政治・経済・文化等々あらゆる知識を吸収することに努め、岩壁君は外交史が専門だが、経済も、文化も出来ると言われるようになりたまえ。近年、歴史の研究者が自分の研究領域に安住しすぎる傾向が強い。

この時の赤子に教え諭すような故豊田先生のご口調は、最近特に強く脳裏にこだましているように思えてならない。

(昭和四九年度卒業・昭和五八年度院博士課程単位取得)

生涯苦学生

堀 田 ト ヨ

ひとくちに通信教育といっても、その入学者の層は多様であらうし、又その目的も種々であらう。従って先生方も、インストラクターの方々もみなみなならぬ御苦労があることと思う。

私が法政の通教に入学したのは昭和二十年も末のことである。

思 い 出

当時私は岩手県の花巻で中学校の教師をしていた。第二次世界大戦の末期東京から花巻に疎開し、そこで三年の間に相次ぎ両親を失ったのである。高校を卒業するとすぐに県の教職員採用試験を受け、花巻中学校に奉職した。大学の通信教育を受けようと思ったのは、二年下の弟を大学に進学させ、卒業した後に姉を犠牲にしたという、心の負担を残したくなかったからである。私も大学を出れば、弟も安心するであろうと考えた。

今振り返ってみると、一番辛かったのはその頃であった。昼は新米教師として教壇に立ち、馴れない授業に声の使い方もわからず、家に帰ると喉も胸もヒリヒリと痛む毎日であった。加えて教材準備があつて、それだけで一晩は過ぎていった。馴れて来ると空き時間等の利用も覚え、少しずつリポート書きに時間が廻せるようになった。岩手の冬は寒い。今のように暖房が完備しているわけもなく、炬燵にもぐり込んで、夜半柱の凍ってひび割れる音を聞きながらリポートを書いていた、それだけにリポートの添削が帰って来る日が待ち遠しかった。また単位修得試験を受けに、ガタゴト汽車にゆられて、一ノ関へ行くのも楽しみだった。

何より嬉しかったのは、スクリーニングで故郷の東京へ出られることだった。夏休みは勤務が学校だったので、比較的自由に上京できた。体育は武蔵小杉の木月校舎のグラウンド迄いった。真夏の暑い盛りにラケットを振ってテニスをやり、汗を拭きながら東横線のホームで電車を待っていると、ポツンと立っているのは木月校舎の時計台と、お風呂屋さんの煙突だけで、その向こうに真赤な夕陽が燃えていた。

弟も大学の工学部を卒業し名古屋に就職したので、私は退職して東京に戻った。そして一年間を通年スクーリングで過ごした。晴れた日は校歌にあるように、58年館の校舎の窓から遠く富士山が望まれた。靖国神社の櫺の美しい紅葉は今も変わらないが、富士山の見える日はあるのだろうか。

「古文書学」の佐藤進一先生と「仏教史」の笠原一男先生は、講義が終ると市ヶ谷の橋を渡った右角のルノアールに、ソロソロと学生達を連れて行って下さった。コーヒーを御馳走になりながら、質問をしたり、先生の御研究や学会の様子など伺ったりした。そこで得たものが、教室以上であったことはいくまでもない、竹内先生には「西洋史概説」と「キリスト教史」を受けさせていただいた。テストの時、学生がノート持ち込み可の「キリスト教史」は、先生もノートを御覧になつて講義されたが、ノート持ち込み不可の概説の方は、御自分も何も御覧にならずに講義され、その先生のお人柄にうたれた。

概説は必修だったから受講生も多く、六、七十人はいたと思う。それでも後の方の席でもよく聴こえ、私語をする人はいなかった。たまたま今日私は、湯川秀樹博士と同僚で理論物理学御専攻の中村誠太郎先生とお茶をいただく機会があった。その折先生は、国立と私立の学生の違いについて、「授業中の静けさと、騒がしさでしようね」と仰言った。四年程前、法政の聴講生になった友人につき合ったことがある。その時、ゼミの少人数の教室では静かなのだが、五十人以上になると、最前列の席でなければ、先生のお声が聴こえなかったことを思い出す。何故今授業中に私語

が多いのだろう。授業料は私立の方が何倍も高いのである。親は我が身を削つて子供達を通学させているのだ。なんだかとても悲しくなった。

現在私は、数人の仲間と古文書を読んでいる。皆不惑を過ぎた女性である。彼女達は歴とした大学卒なのに、日本史出は私の外二人しかない。三十歳を過ぎて人生の目的を考え、何かを求めてカルチャーセンターに行つて、そこで古文書と出会つたというのである。それを聞いたとき私は、彼女達にとって大学とは何だったのだろうと思った。そして大学という所は、一律に十八歳で入学するのではなく、それぞれ「生きる目的」を考えた時に入学すべき所ではなからうかと思つた。

ともあれ「古文書が生き甲斐」となると、解説の上達よりはめざましい。私はカルチャーセンターに行く時間があるのなら、それぞれ母校の日本史（又は国史）学科の聴講を奨めているのだが、なかなか実現しない。大学は一度卒業証書を手にしてしまうと、数居の高い所となつて、単なる青春の一通過点にすぎないとしたらあまりにも淋しい。人生という大海をただよう数多の卒業生にとって、母校は常に母港であつて欲しいと切に願う。

（通信教育部昭和四十八年度卒業）

大学時代の思い出

島村 芳宏

私が史学科に入学したのは昭和四十七年四月で、その時は

漠然と西洋史、それも古典古代の勉強をしようと考えていました。しかし二年になった時、本格的に西洋史の勉強をするならば、原書を講読できるだけのいくつかの語学力が必要であることを知り、専攻の再考を考え始めていました。

そのような時、同級生の一人が「近世文書研究会」という古文書を勉強する会があり、自分はそれを見学に行くから一緒につきあってくれといわれ、私も暇であったので行くことにしました。場所は六十九年館の二階、たしか九二六号室だと記憶しています。

室内には一〇人位おり、多少先輩の人が、黒板に向かって何かを説明しているところでした。後でその人が研究会のOBで、大学院生であることを知りましたが、友人と私は見学に来た旨を告げ、その時テキストとして使われていた古文書の青焼きコピーを見せて貰いました。これが古文書との初めての出会いでした。もちろん初めてのことでしたから、さっぱり分からないまま、ただ先輩の説明を黙って聞いていただけでした。それでも何か面白そうなので、その後も週一回の研究会には顔を出すようになりました。

その年の夏、研究会の二回の合宿で長野県小県郡和田村（旧和田宿）の旧問屋の遠藤氏宅、および八王子市の法蓮寺に宿泊し、宿場関係や八王子千人同心関係など、実物の古文書を初めて見て読解にかかりましたが、ほとんど読めずOBの先輩方に大分絞られたことを覚えています。

こうして近世文書研究会に入会したことがきっかけとなって、当時研究会の顧問を勤められていた村上直先生や丹治健蔵先生を

はじめ、研究会のOB諸氏・大学院生の方などと知り合うことができ、また史学研究室にも出入りするようになりました。

この当時の法政は、いまだ大学紛争の最中で、学生による授業妨害・試験妨害、また学校側によるロックアウトなどが度重なり、授業を落ち着いて聴けるような状況ではありませんでした。そのため研究会では、古文書の講読を学ぶだけではなく、日本史一般のこともいろいろと教えて貰い、その渴を癒したものでした。

大学全体はこのような状況でしたが、その一方で東北大学から法政へ来られた故豊田武先生や村上先生などが中心となられて、大学院と学部との交流をより深めようと計られておられました。その効あつてか、学生達は先生方の外に、大学院生の方にもいろいろと教えを受けることができる状況になりました。私も研究会とともに、大学院生の方から学んだことはその後大いに役立ちました。

昭和五十一年四月、私は浅学非才の身も顧みず大学院修士課程日本史学専攻に入学し、村上先生の下でさらに三年間学ばせていただきましたが、現在に至るまでこれといった学問的成果をあげることができず、先生に対してまことに申し訳なく、忸怩たる思いです。

私が入学した頃の大学院日本史学専攻は、博士課程・修士課程合わせて三〇名を越す当時としては大所帯でしたが、その活動も活発でした。院生の自主編集になる『法政史論』の刊行を始め、東京近県の日本史専攻の大学院生によって運営された「日本史合

同研究発表会」への参加、八王子セミナーハウスでの合宿、また学部学生との合同調査・合宿なども行なわれました。個人の研究は別として、日本史学専攻として活動する場合には、必ずしも専攻時代の縦割りの枠に縛られることなく、運営協団体として院生が活動していかうとする意識が働いていたように、私には感じられていました。

また法政大学大学院日本史学専攻は、全国でも稀有の二部（夜間）の大学院ですので、先輩・同輩には学部から入学した者ばかりでなく、社会経験も豊富で、かつ学問・見識も一廉の方々も入学されていましたので、そのような方々から得たものもいろいろとありました。あまつさえ、そのような方々のお力添えを以て、その後諸方面に就職することができた院生・学生の数は少なくありません。かくいう私もその一人です。浅学非才の身でありながら、今日こうして美術館に勤務して仕事をしていますのも、元を正せば法政大学に入学して、警咳に接することのできた当時の諸先生・諸先輩方のご指導ご鞭撻のお陰だと感謝致しております。また、在学中に知りえた方々との人間関係は現在の私にとって大きな財産です。そういう意味では外的環境は良好ならずとも、良い時に法政大学文学部史学科および大学院日本史学専攻に在学できたと思っています。

末筆ながら、法政大学史学会のますますのご発展をお祈り致しております。

（昭和五〇年度卒業・昭和五三年度院修了）

思い出雑感

根 崎 光 男

私が法政大学史学科を卒業したのは、昭和五十二年三月である。しかし私の場合、その後六年間大学院に籍を置いていたから、大学には合わせて十年間在籍していたことになる。そのため、つい五、六年前まで大学に通っていたことになる。一見、長い歳月のようであるが、今思い出してみると実に短かったというのが実感である。それだけ日々時間に追われていたということであろう。

大学に入学した頃は、校庭の鉄柵堀沿いにバラックのサークル室が所狭しと立ち並び、各部屋の前にはヘルメットやら、竹ざおが置いてあり、学内紛争でまだ揺れていた。このような状態であったため、学期末のテストをほとんど受けることなく卒業したが、逆に短期間に多数のレポートを提出しなければならず、いつも閉口していた。

このような学内状況にもかかわらず、一般学生は比較的のんびりしたもので、当世の学生氣質を満喫していた。単位を取得するのに出席率がいま重視されず、あまり興味のない授業に出ないという要領の良さは、今も昔もかわらないだろうが、これぞという授業は皆熱心に聞き入っていたものである。当時の史学科は豊田武・河原正博・村上直・安岡昭男・倉持俊一・伊藤玄三の各先生方であったが、それぞれ個性あふれる講義を展開されていた。

私は近世史を専攻したので、村上先生にご指導いただいたが、当

時の先生はまだ若く——今でも若いのですが——血気さかんで、私にとっては非常にこわい存在であった。しかし、女子学生には優しかったようで、村上ゼミは女性が大変多く三対一ほどの比率で、私たち男子の影は薄かったような気がする。ゼミの運営はゼミ生が交替で報告し、それに質問をし、先生がアドバイスをするという形式であったが、一夜潰けに等しいながらも、内容はともかくとして、よく調べていたと思う。ゼミの合宿も楽しい思い出である。私が四年の時、都下の五日市町の禅寺で合宿をしたことがあった。合宿にはほぼ全員のゼミ生が参加し、女子の多い合宿はさぞ賑やかで、楽しいのであろう、と考えていたが、その中味は惨々たるものであった。というのは、朝五時半頃に起床し、二時間ほどの座禅を組むのである。本来なら、夕方にもやるのだが、早起きに慣れていない私にとっては地獄であった。それとゼミ生交替での自炊、これも楽しい思い出である。この時炊事をきり回してくれたのはD君であり、新たな一面を見た思いがしたものである。授業中では発見できないことが、こうした合宿の際には気づくものである。

その後、私は大学院に進み、まもなくして史学研究室の事務を週に二回担当することになった。当時は大学院棟の隣の建物の保健室の二階にあったが、狭い部屋でいかにも老朽といった感じであった。学生五、六人が入るともう一杯という状況にもかかわらず、比較的研究室への出入りは多く、多数の学生・院生が利用していた。ここはまた村上・安岡両先生の研究室で、向い側が伊藤先生の研究室であったから、個人的にいろいろな話を伺う機会が

思 い 出

あり、貴重な人生勉強をさせていただいた。しかし、研究室の勤務のなかで、忘れられない思い出がある。当時、おそらく学内への機動隊導入問題であったと思うが、一部学生が先生方にその責任をめぐって糾弾を繰り返していた。その頃、文学部の事務の方から「お宅のK先生が捕まっています。そちらで対処して下さい」という。この時ばかりはさすがに困惑した。そのうち、いつも研究室に來ている先輩たちがまもなく来るだろうと数分待ってみたが、このような時だけ誰も来ないのである。そこで、この日お休みしていた豊田・村上両先生のご自宅に電話を試みたところ、「K先生は今体調をくずされているから、長時間にわたらないように、すぐ助けに行ってくれないか」というご返事であった。丁度その時やって来た後輩に研究室に残ってもらい、早速現場に駆けつけてみた。そうすると、K先生と地理学科の先生とがテーブルで積み上げられた壇上に上げられ、二十数人の学生に取り囲まれていた。時間の経過とともに、K先生の疲労感が目に見えてわかったが、非力な私にはどうすることもできず、ただ傍らで終わるのを待つだけであった。二、三時間ほどして解放された先生に「お疲れさまでした」という言葉しかかけられない私に「大丈夫だ」という言葉は何にもまして有難かった。あの時の事を考えると、K先生には今でも申し訳なく思っている。

このような思い出を残してくれた法政大学史学科を卒業して感じることは、まずもう少し史学会を盛大なものにできないか、ということである。他大学の史学会が旺盛な活動を展開しているのを見聞するにつけ、いつもうらやましく思っている。当然、卒

業生の問題もあるうが、魅力ある企画で活気あるものにしてほしい。未来ある法政大学史学会のためにも……。

(昭和五一年度卒業・昭和五六年度院博士課程単位取得)

在学時代の想い出

―師・友・サークル―

鈴木(旧姓狩俣)英美子

あれは、三年生の時だったろうか。

吾妻鏡を豊田先生を開んで、ゼミ生十名程が読んでいた時のことである。突如、一人の長髪の男子学生が立ち上がり、「今、俺たちは、こんなことをしていいのか。もっと、やらなければいけないことがある。俺たちが、こんなことをしている間にも、世界中では……」というようなことを間断なくしゃべり続けた。そこに居た私たちは、啞然とし、ひとしきり彼の演説を聞いていたのである。

そう、あの時代は、学生運動の火が、もうその炎を消さんとしている時だった。

彼の体制打破の主張に対し、何人かの男子学生が、「うるさいんだよ。」「何、言ってるんだ。」「今は文書を読んでいるんだ。」などと彼に浴びせ、言い合いが激しくなっていた。

そんな言い合いを遮るように、豊田先生がおっしゃった。

「出て行きたまえ。」

静かで、それでいて、お腹の底にずしりと響く声であった。

彼は、下駄の音を鳴らして、九年館の教室から出て行った。

その講義が終って、学生ホール上の食堂で先生と昼食をとっていた時、先生は、

「彼の言いたいことも分からない訳ではないね。……でもね……」と言葉をきられた。

箸をとめて、そう、ぼつりとおっしゃった。今は亡き、豊田武先生のお顔が忘れられない。

先生のお宅へ何度もおじゃまして、書き上げた卒業論文を私は、今も、史学科で学んだ足跡として、書棚に置いてある。

尊敬すべき師との出会いと共に、私は、数多くの友から、大きな影響を受け、史学科の四年間を過ごしてきた。

現在、都内の中学校で教鞭をとっている友、誰よりも勉強熱心で、国史大系をかかえていたっけ。ビル掃除のアルバイトをし、自立している姿に驚かされたのを思い出す。

やはり、千葉県の中学校で教員をしている友。生徒一人ひとりのことを、ノイローゼになる程、考えてあげているだろうな。いつまでも、文学青年でいることだろう。

体育科に進まなかったのが不思議なくらいのスポーツマンは、今は、役所勤め。一見、遊び人のようで、本当は、真面目人間だった。

河原先生と一対一で東洋史に没頭していた友。高校の専任であり、大学の講師でもある彼は、勉学の毎日なのだろうか。どんな論文を書いているだろう。

私たちの仲間では、最も年上でフェミニストであった友。美人で

おきやんな彼女のハートを見事に在学中、射止めたっけ。郵便局でも周りの人たちに、何かほっとする優しさで接しているんだろ
うな。

最も年下なのに、雑学ならお任せの友。史学科の研究室に毎日通って、よく勉強していたっけ。今は、京都で、相変わらず古文書と暮らしている。早口が懐かしい。

そして、豊田先生の愛弟子で、小柄な先生の重い鞆をいつも持って歩いていた友。板碑の研究で埼玉県庁勤め。好きなことを思いきりやっていることだろう。

史学科の同じクラスに籍を置いたことが、彼らとの出会いになり、多くのことを学んだ。各自がテーマをもって、レポートを発表し合ったり、教員を目ざして、テストを受けに行ったり、また、中学生相手の塾を開いたりと考える前に身体が動いていたあの頃である。

三年間ではあるが、史蹟踏歩会に所属していたことも、私の学生生活においての一ページである。

顧問の芥川先生とはあまりお話できる機会がなかったのだが、卒業後、豊田先生の最終の記念講義の際にお会いし、その時、友がとってくれた先生とのスナップ写真がアルバムにあるのが嬉しい。

諸先輩方や仲間たちと飛鳥の地を歩いたり、発掘作業に行ったり、石碑の調査をしたり、時には、ソフトボールやバレーボールで遊んだりと次から次へとサークルでの思い出が頭に浮かんでくる。

思い出

教員試験のために最後までサークル活動を続けず、先輩が私に教えてくれた数々のことを後輩に伝えずにきてしまったことが悔やまれてならない。夫に踏歩会からの葉書きやパンフレットが送られてくるたびに羨しくながめている。

思い浮かぶままに、法政大学時代のことをふり返ってみたが、小学校の教員をしている現在、子供たちに話すことは、「よい師、よい友、よい仲間」にめぐり会うことの素晴らしさであり、「人間は、他から必要とされてこそ、生きる価値がある」ということ。史学科に所属し、数多くの師から教え導かれたこと、数多くの友と悩み過ごしてきたこと、歴史を通して、人間を通して、自分の生きる価値を知らされたことは、私にとって欠けがえのない四年間だったのである。

(昭和五〇年度卒業)

史学科の思い出

小出輝雄

「法政史学」の史学科創設五〇周年記念号に学生時代の思い出をと原稿を依頼されて、考えこんでしまった。入学したのが昭和四八年四月。まだ学園紛争の余燼冷めやらぬところで、大学構内に大きなタテカンがたくさんあり、試験もときどき中止になるという頃であった。こんな時代であったから、勉強をやりに大学に入学したとは必ずしも言いかねるとはいえ、入学式につづいて全然授業がなく五月の連休になるという大学の様子に、大変面

食らったことをおもいだす。こんな状態では知人といえど同級生、それも史学科と地理学科の連合クラスで、わたしの友人は地理の人間が多かった。そのような時に考古学研究会には本当の偶然で入部できたことが自分の一生を決定したような気がする。もともと歴史が好きで史学科に入ったのであるが、それまでは近代史を専攻したいと考えていたのが、夏休みで横浜市内の調査に参加して以来病み付きになり、ほとんど授業にも出席しないで、現場に出っぱなしという状態であった。これは学園紛争とマンモス大学という状況下で、授業はつまらない、欠席したって関係ないというようなことだったとおもう。

二年の時に考古学の先生として伊藤玄三先生が着任され、僅か三畳程の広さの史学科の物置に考古学研究室の看板を掲げられた。板橋区や福島県田島町の調査を精力的に進められるとともに、法政考古学会を組織された。これによって現在考古学の第一線で活躍中の諸兄が生まれる基盤が整ったと思われる。当時の学生をまとめるのは大変だったのではないかとおもう。それまで考古学を卒論のテーマとする学生がいたのであるが、各自のツテをもとに自由にやっていたから多彩な人間が揃っていた頃である。板橋区西台遺跡の調査は、伊藤先生指揮の下で大学院生の大坪先輩を中心として学生多数が参加して考古学研究室が初めて実施した発掘調査である。この調査で直接の指導を受けて、授業以外の先生の一面を見ることも多かった思い出多い発掘であった。

その後、町田市の校地内の遺跡調査を行なうことになった。当時はまだ町田移転反対の声が高く、身の危険を感じるような状況

で、極秘に調査をはじめた。最近その調査を含めた発掘調査報告書が刊行され、町田校地も多摩校地として様相を一変させて開校しているという話を聞き、時代が変わったなあという思いを新たにしている。

学生時代の思い出といっても授業についてはあまりない。これは授業にあまり出席していないのが主な理由である。思い出というに恥ずかしいが、日本考古学の期末リポートのテーマを友人より聞き間違えてしまい、リポート提出後たまたまお会いした某先生に「トンチンカンなリポートを出したのは君か」と言われたことを思い出す。

(昭和五一年度卒業)

通教生時代をかえりみて

天野 繁子

学びたいという慾望にかられ乍ら、月日が流れ、学校に通う事をあきらめていたところに、慶応大学の通信教育を受け卒業間近にいる友の誘いで入学した。太平洋戦争中女学校の教育、学徒動員、戦災にあい、疎開、転校し、卒業、戦後のきびしい生活苦の時代を過ごし、都会に戻り、働き乍ら夜間の高校を一年、専門学校を途中退学の学力では、戦後の新しい教育を受けた人達と違って、私には大学課程の勉強は無理であった。が、慾望は捨てられず、学校より送られてくる教科書を読み、理解に苦しみ乍らレポートを書き提出、最初の頃ははいねいに書き、ほめられたが、



真岡方面の見学（昭和48年8月18日）

だんだんと雑になった。また、試験を受け単位が修得出来た時は嬉しかったが、落ちた時はみじめであった。二年位慶応に在籍したが、法政に通信教育を受けていた友が、法政はとて面白い、立派な先生方も揃っているし、通教生に対しても、よく指導してくれて親切にして下さるから、是非にと勧められて、すぐに転校許可してもらったのである。が、送られてくる教科書は、私にとって難かしく、レポートを書くにも一人で学ぶ事は遅々として進まず、やっと単位修得資格を得ても落ちたら恥ずかしいと思ひ、そのままに月日を過ごしてしまふ事も度々であった。しかし、思い切って試験を受け、合格通知をもらった時の嬉しかった事忘れられない思い出の一つであった。又幸い法政大学川崎校舎は、当時の私の住居から歩いて行ける位近く、開講される一般教養、体育はそちらで受講、通学には便利であった。又春期、秋期、冬期と夏期以外にもスクーリング受講が許され、私には好都合であった。受講し乍ら、帰って来て仕事、又夏期は午後開講された授業を撰択、午前中仕事をしてから通学出来た事もあり、ずい分恵まれていたと思うのである。それにしては卒業迄年月がかり過ぎたではないかと叱られるかもしれない。仕事をし乍ら受講で試験勉強も思う様に出来ず悪い成績も多かった。又夏の暑さと疲れで試験中目が見えなくなり答案が書けなくなり、目として休んだ後、かすむ目で夢中で書き上げ時間内に提出出来た事もあった。恵まれていると思ひ乍らも、地方から上京し、その間勉学に集中出来てさぞよい成績を修めた事と羨ましく思ふ事もあったが。反対に遠い地方から家族と別れて上京、高い滞在費を使い、不自由な生活

をし乍らの勉強をしていた人は私の立場をいいと思ってくれた人もいたかもしれない。そんな些細な事はどうでもよい。スクーリング中、苦勞をし乍ら共に学び語らい励まし合う友達が出来た事を年をとっても学生生活のひとときを大学の校舎の中で味わえてどんなに嬉しかった事だろうか。小、中、高校の教員をし、更に学ぶ人達と触れ合い教わる事も多かった。自分の無力さにみじめに落ち込む事もよくあったが、それでも少しずつ学び得る喜びを噛みしめ乍ら受講中同学出来た事は本当に有難い事であった。そしてスクーリング中どの先生も通教生だからと云って差別する事なく、質問してもよく教えて下さり、廊下で会うと優しく語りかけて下さった先生もいて大変嬉しかった。同じ方向に帰る先生と電車を共にし、「この年で学校に通い、これから学ぶのが恥ずかしいです」と云うと、「君、僕の子供位にあたる年で何を云う。僕もこれから世界でも一番難かしいギリシャ語の勉強をするのだよ。勉強しなさい」と励まして下さった事も印象に残っている。いろいろ語り励まして下さった先生方に心より感謝すると共に、今その先生に会えたら卒業出来た事を心から御礼を述べたい気持ちで一杯である。やっとの思いで一般教養を終えた頃、昭和四十八年の夏期スクーリング中八月十八・十九の両日、村上直先生御指導の下で栃木県の真岡・足利方面へと史跡見学一泊旅行に十六人の皆さんと参加させて戴き、先生や友と楽しく語らい一夜過ぎた思い出を大切にしたいと思うのである。大学の教授、私には余りにもかけ離れた境遇の先生に、同じ宿で学習指導を受けられた喜び、感動は今もいきいきとよみがえってくるのである。真岡の海

潮寺や代官所跡を見学、寺の縁起や天領のお話、足利の名利鑑阿寺や足利学校・岩宿遺跡を見学した時の嬉しさ、その時お世話して下さった小山市在住の森田久男氏（昭和四十九年度卒業）に今更乍ら感謝したい気持ちで一杯である。彼も私の家に二、三度来て下さった事もある。再会したい。その後、村上先生のお家も近かったので訪問させて戴き教えを受けた事も感謝している。仕事のあい間をみて通年スクーリングも週に二回ぐらい出席させてもらい昼間の学生さんと肩を並べて講義を聞き、若い学生さんに助けてもらい乍ら勉強した経験もあった。卒業論文を書く女学生さん、資料を集める為に、「国会図書館に行くから一緒に行きましよう」等と親切に誘ってくれた事もあった。私も何時かそんな日が来たらと、希望を持ち乍ら案内してもらった事もあった。又東横線の元住吉の駅近くで小さな、小、中学生の学習塾を営んでいて、小さい教室もあったので、神奈川学習会に私の所を利用してもらった事もあり、私にはよい体験であった。又、スクーリング中私の所に滞在して通学してくれた人もいてくれて、ずい分刺激された事もあった。でもその人達は、私より早く卒業して今地方で大分活躍している。仕事のかたわら、ピアノのレッスン、茶道の修業、未熟な私には生活の為とは云え、仕事も多すぎた。その為卒業単位を満たすのにかなりの年月がかかった。それも云いわけに過ぎない。学業の方が大切と思ひ何度か習い事の方を捨てようかと考えたが、意志薄弱の為が続いていたのであった。そしてやっと学科の単位も修得でき、卒業論文を残すのみという所迄漕ぎつけたが、先程書いた様に諸々の仕事の為、卒論にとりかかる

事は困難であり、茶道に関するものを書きたい、それには本を読まねばとあせり乍ら、時間が許されず、図書館にも通わなかった。手続きをすれば、仕事は休まねばと思うとやはりにぶり、つい仕事優先で、在籍料を毎年大学に納めながら、何年か又見送ってしまったのである。

その中別居していた主人の方より、母親が病気でと云う事を聞かされ、戻らねばならず、実家では、家の権利をめぐる問題がおき、解決出来ないまま、学習塾をとり、千葉に移り、実家の母親も入院、いろいろ苦勞が重なる時は、重なるものである。姑が亡くなり、こちらが少し落ちついた頃、主人が、「何をぐずぐずしている。卒論を残して後は学科の単位が修得出来ているのか。もし本当なら学校に行つて、手続きをし早く論文を書いて卒業しなさい。何年かかっているのか、最後迄きちんとやり通さねばいけない」等説教された勢いで頑張った。主人は単位が修得出来ないのだからと疑っている。疑いを晴らす為に、やらねばと、思い切つて通教の事務所へと向かい手続きをする。幸い事務所でも親切に、指導教授、中野栄夫先生を紹介して下さったのである。そして卒論を書くに当り、御指導と共に、直接指導してもらえ石田雅彦氏を紹介され、すぐ相談する様にとお手紙を頂戴したのである。そして石田氏も親切に参考書を何冊か紹介してくれ、資料の集め方、書き方、卒論を書く時の注意事項等きめ細かい指導、それから市原の姉ヶ崎より、千葉の図書館、国会図書館、大学の図書館へと通い資料集め、参考書、本等読み乍ら下準備を始めたのである。ある時、内閣文庫迄行ってしまった事もあ

る。すると、石田氏に、「君ずい分勉強家だね。そこ迄行かなくも国会図書館に本はちゃんとあるよ」等と冷やかされ、恥ずかしい思いをした事もあった。夏期スクーリング中、中野先生に資料を見せ、面接指導を受け、秋より下書を始めた。石田氏の所に見せに行く。「貴女のは論文どころか、作文にすぎない」と叱られ、笑われたり、直してもらい書き直しては持つて行く。数回繰り返している中に、だんだん要領もわかり、少しは緊張感もそれ石田氏に面会出来る様になった。初めての事で本当に私には困難な事であったが、よく私の様な者の面倒を見て下さった石田氏に心より御礼を申し上げたい気持ちである。

その時、実家の母が入院中、実家の家作の所有権をめぐるの争いを弟がおこし、裁判迄かかえ、川崎へ月に五、六回通い乍ら母の看病、裁判所・弁護士在所へと行かねばならない羽目に落ちこみ、心配事が重なる中での勉学、無我夢中、どんな事がおころうともやりかけた事は、最後迄やらねばならない。最後の一月十日の論文提出締め切り迄は、暮も正月も主婦としては失格であるが、家事を放つて書き上げた。今思うと主人もよく協力してくれたと思うのである。卒論面接の時、中野先生よりもう一度書き直して「法政史学」にと云われ、私に研究発表等出来るかしら、立派な先生方の前でと、目がくらむ位、不安であった。でも中野先生が、又更に御指導して下さいとの事、これも自分の勉強の為に、おすがりしてやらせてもらおうと決心したのであった。五十八年三月二十四日、若き大学生と共に武道館で卒業式にのぞめた事は、本当に感激であった。若い頃から大学で勉強したい。学生

生活を夢見ていた私、年をとっても実現出来、卒業出来た喜び、本当に嬉しかったのである。でもその日は実家の母も病院で臨終を迎えていた。が病院をそっとぬけ出して卒業式に出席させてもらったのであった。卒業証書もらいすぐ病院に戻ったが、意識不明の母には見せられなかった。二日後母は他界した。そして一年後、研究発表させて戴いた事、私にとって本当に貴重な体験であった。生涯忘れる事の出来ない喜びであった。この様にいろいろ学び得た事を無駄にする事なく、それを土台にして学び、残る人生に、今迄、諸先生・先輩方の御恩に報いるべく地域社会の為に働きたいと思うのである。お忙しい中、通教生である私を親切に御指導して下さいました中野先生、石田氏に心より感謝申し上げますのである。

(通信教育部昭和五七年度卒業)

史学科の思い出

鈴木 木(旧姓大熊)理恵子

先日、史学科創立五〇周年を迎えたことと、『法政史学』の第四〇号の記念号刊行の話を目にし、とてもうれしく思うとともに、また、学生時代が懐かしく思い出された。思うに、大学を卒業してもう五年の月日が流れてしまっていた。私の学生時代にも、大学が創立百周年を迎えたり、野球部が六大学野球で三回も優勝するなど、法政の学生であることにとてもうれしく、誇りのようなものを感じることがあり、その時の感激が今でも心の奥

に、愛校心として残っているのだと思う。

昭和五十四年春、不安と期待に胸をときめかせて史学科に入學した。史学科の学生は法学部や経済学部の学生とは違い、ただ漠然と、また将来の就職を考えて受験するのではなくひたすら古文書を読むのが好きであったり、歴史という人間のこれまでの変遷をたどることに魅力を感じたりして、純粹に歴史が好きで、勉強したくて入ってくる学生がほとんどであった。そのため、人間的にも、個性のある、とても愉快な学生ばかりだったと思う。史学科の学生が、一クラス半という少人数のため、そして先生方の温かいお人柄があって、ゼミを越え、先輩・後輩を越えて学生が交流できたのであった。私は、大学に入った時から西洋史を専攻することに決めていた。高校の時から世界史が好きで、卒論はフランス革命か、または第一次世界大戦あたりを書きたいと思っていた。しかし、ゼミの指導をしてくださる倉持先生の、西洋史概説(2)の講義を受けてから、卒論のテーマは史実の研究から歴史そのものともいうべき、歴史の発展とは、ということに疑問を持つようになった。私の卒論のテーマはもうこれしかない、とそれから迷うこともなくなり、テーマ自体はあまりにも大きすぎはしたが、自分の中でこの課題が消化できたらと、オーバーではあるが、ライフワークのようなつもりで卒論にとりくめたことが、とてもうれしく感じたのであった。また、それまで論文など書いたこともない者が、たった四年で何百頁もの論文を書けるようになるのは、諸先生方の講義を聞くことによって感じる研究態度の熱心さ、そして講義内容からの先生方の課題とその研究の仕方など

を学ばせてもらうことができたからだと思う。講義では、それぞれ自分の中でその受ける態度によって、いかなる問題も問いかけることができるのである。今でも先生方の真剣な講義や、また、教科書には書かれていないさまざまな説の紹介などで、何度となく頭がリフレッシュされたことを思い出す。また、毎年春に行なわれた史学会の総会や例会、研究室の開放など、先輩である院生の方達の諸難用のご苦労と、また研究発表を聞かせていただく機会も与えられた。私も何回となく研究室のドアを叩き、そのまま親睦会なるものへ移ってしまうことが多々あった。わが法政大学史学科の各ゼミのコンパは派手に行なわれていたようだが、特に倉持ゼミは先生のお人柄か、毎年何度も行なわれていた。秋の合宿の盛り上がりは最高で、それぞれ隠し芸が披露され、明け方まで、人生の大先輩である先生を囲み、白熱した議論を交わしたものだ。また、先生のダンディなお姿や、専攻であるロシア史から想像されるロシア料理のイメージとはかけ離れた赤のれん好き、酒好きは、大そう私達学生を驚かせ、また喜ばせたものだった。そして一次会が終わると帰るというシャープな身のこなしは、ただただ人間ができていると私達学生をうならせたものだった。先輩・後輩を越え、またゼミを越え、先生の人間性に触れられるコンパや親睦会など、思い出に残る機会をもっと持たかったように思う。もっとも、卒業しても、何回かゼミの同窓会を行なっているが……。

今後とも、法政大学というマンモス大学の中のこのような少人数の学科ならではの特性を生かし、学生と先生方の交流を密に

し、史学科が限りなく発展していかれることを、期待している。この度は、史学科創立五〇周年、『法政史学』四〇号刊行、おめでとうございました。

(昭和五七年度卒業)

法政大学西洋史ゼミの思い出

山 田(旧姓内野)朋 子

私にとって、法政大学史学科とは西洋史ゼミであり、西洋史ゼミといえば倉持俊一教授である。私の在学当時、西洋史専攻には倉持先生ただひとりが専任教授でおられたから、古代史や中世史、イギリス史やフランス史等を希望している学生もすべて、倉持ゼミに入ることになっていた。これは、様々な専門分野の教授が何人もおられる日本史専攻と比べ、中国史を中心とする東洋史専攻と同様に、専任ひとりというのは余りに少なすぎると言わねばなるまい。ロシア近代史を専門とされる倉持先生は、法政大学西洋史専攻の看板のもと、孤軍奮闘されていたわけである。

学生が教養課程から専門課程に進み、ゼミを選択する時、先生方は、それぞれのゼミについて一言ずつ紹介をする。その時、倉持先生は「西洋史ゼミをなるべく希望しないように」と言われたことをよく覚えていた。その理由としては、外書講読を中心とするゼミの授業は、なるべく少人数、せいぜい二十人が限度であるからという。さらに、先生はロシア史がご専門であるから、「古代史や中世史をやりたい諸君には悪いが、ゼミの授業では、ロシア

近代史を中心にした論文を読むことになります」と紹介された。大学に入学する以前から、大学では絶対にロシア史を勉強したいと考えていた私にとっては、倉持ゼミの存在は、まさに宝くじにでも当たったようなものであり、ゼミに入る日が待ち遠しい程であった。しかし、この紹介の言葉は、そんな浮き足立った私の気持ちをはきしめ、現実の厳しさを自覚させるものであった。それ故に、何か入口でつまづいたような淋しさも感じさせた。

後になって、専任教授を何人も抱える西洋史専攻のある大学ですら、多種多様な学生の興味に対応しきれないのが現実であることがわかってきた。ましてや、ひとりで数カ国語に精通し、どんな国、どんな時代の史料や文献でも、問われればボンと答えられる、などというような、コンピュータのような教授がいるわけがない。とすれば、倉持先生がこのようにゼミの紹介をされたことは理にかなったことであった。このことは学生にしても十分納得のいくことであったが、それでもこの言葉が淋しく聞こえたのは、私ばかりではなかったと思う。最終的には、二十数名が西洋史ゼミに入るようになった。

各学生が希望する国や時代が、バラバラであるのは、西洋史ゼミの宿命だとしても、ゼミに出席する学生間で、何か共通の場を持つとうと、読書会を計画したことがあった。しかし始めてみると、本の選定が困難な上、人が集まらず、やっと何人か集まってみると、方法論を論じあうばかり、という空転を繰り返していた。そんな学生間のシラケ（この言葉ももう過去のものとなってしまった）た気分を埋めるように、何度か開かれたコンパでは、倉

持先生が美声を披露して下さった。またその時には、授業中ではとても口に出せぬような、学生の辻つまのあわぬ要求にさえも、よく耳を傾けて下さった。

ゼミに入る時には、どこの国、どの時代をやりたいと簡単に言っていたのに対して、さていよいよ卒論のテーマを選ぶとなると、大問題であることに気づかされる。「何をしたいか」ではなく、「何ができるか」から始めなければならない、という折にふれての倉持先生の注意を、実感するようになった時には、もう残り時間は余りない。絶対にロシア史と決めていたはずの私も、具体的なテーマとなるとまるで決まらず、締切りを前にしてあたふたした。結局、思い出す度に赤面を禁じえないような卒論となってしまった。

それでも、おかしい話だが、卒論を書いてみて始めて、「史学科」の入口に立ったような気がした。ゼミに入る時につまづいた、入口の敷居の高さにやっと気づいたのである。西洋史を希望しないように」という言葉は、西洋史を研究することの難しさを指摘した言葉なのだ。このことに気づいた私は、無謀にもその先に進むことにした。

「歴史を専門にするのは大変ですよ」とは、私の希望を聞いた倉持先生の弁である。この言葉もやはり、行く手の困難さを的確に語られた言葉だ。私自身の能力を顧ることなく、この言葉を傲慢にも無視したが故に、今日まで、やればやる程わからなくなり、課題が山積してくる、歴史研究の迷路をさ迷っている。

私にとって、このように、法政大学時代を思い出すことは、学

問の厳しさと、それを安易に選んだ自分を反省することである。本学の西洋史専攻が、より充実するよう、願ってやまない。

(昭和五三年度卒業)

史学科雑感

濱 田 浩

法政大学は、「門を叩く者を拒まず」といった度量の広い学風があつて、先生方も、真理を追究する熱意が漲っており、学問に対する真摯な姿勢が伝統として受け継がれている。

また、大学院日本史学専攻は全国でも特異な存在で、夜間授業を行っており、仕事を持ちながら研究する者にとって、救世主のような役割を果たしています。

私は、東京教育大彫刻科を卒業後、しばらくたつてこのことを知り、受験したのであるが、大学院入学まで、歴史学に関しては全くの素人であつた。そのような人間ですら、門戸を開き、研究の機会を与えて戴けたのであつたが、入学後、授業に出てみて、自分の学力不足に愕然としました。古文書は読めないし、先輩院生の発表する内容が、全くといってよい程、理解できなかった。そんな私をみかね、先輩の石田・小野両氏が月一回、古文書の輪読会を開いてくださり、叱咤激励して戴けたことは、とてもありがたかつた。また、中世史を専攻していたが、どの専攻分野も、私にとっては同じスタートライン上にあるという「開き直り」と「厚顔無恥」さで、他専攻分野の授業にも出席させて戴き、い

ろいろな先生方の御研究の一端を垣間見たことは、大変、有意義なことであつた。

村上直先生の近世史(日本史学概論)では、研究史上、基本となる著書・編書・その他、種々な文献を解題され、その後、院生ひとりひとりに課題を与えられて、それを調査発表する内容であつた。私には、「集古十種」についての課題が出され、調査方法もわからないまま、手探りで、何日も国会図書館・文書館に通い、それを丹念に整理して発表したところ、思いがけないお褒めの言葉を戴き、自信らしきものが出てきました。今、顧みるに、先生は自信喪失していた私を勇気づけてくださったのではないかと感謝しています。

安岡昭男先生の近代史は三年間受講させて戴き、近代史専攻の院生と分け隔て無く扱って戴けたことは、とても有難かつた。先生は対外文化交渉史の研究が専門で、それらに関する諸問題を、多角的な視点から解説して戴けた。また、先生は記憶力が抜群で、頭の中には、近代史上における人物と関連事項が百科事典のように整理収納されていて、どのような人物に関する質問をしても、即座に、お答え戴け、後から必ず、関連した史料を提供してくださつた。

講師の山脇悌二郎先生は、僅か二、三人の受講生のために、ご自分の研究日を出張講義に当てられ、蘭語や交易史について、いろいろな研究論文の紹介と、その分析方法を丁寧に解説してくださつた。最初、横文字に弱い私などは、史料いっぱいにうめられた蘭語の文字にアレルギーを覚えたが、先生のきめ細かい解説と

熱意とお人柄に魅了され、三年連続して受講させて戴きました。

河原正博先生の東洋史学演習では、「大越史記全書」の輪読を行い、時々、先生からのご質問を受け、答えに窺すると、微笑みながら静かな口調で、詳しく解説された先生の穏やかなお顔が、今でも、目前に浮んできます。

西洋史の倉持俊一先生は、教育大時代に授業（ロシア近代史特講）を受講させて戴き、存じ上げておりましたが、その当時は、黒板いっぱいロシア語をなぐり書きされ、革命時のロシア社会を分析する熱弁と迫力に、私はいつも圧倒されておりました。大学院では、英語文献（バイプス著レーニン伝）の講読だったため、先生の持つている深淵な学識を、授業で引き出せなかったのが、今になって思うと心残りである。

最後になりましたが、中世の中野栄夫先生は、大学院二年の時、お会いし、以来、数々の御指導を賜りました。先生の魅力は、明晰な頭脳の背後にある人間的な深さであろう。

学問に対しては厳しく、史料の分析方法が甘いと追求の手が緩まず、いつも冷汗を掻きながら、頭を垂らすばかりであったが、授業終了後、皆で新宿の飲屋に繰り出し、先生と御一緒に杯を重ねていくと、授業での失敗も、きれいに洗い流すことができた。先生は酒がお好きで、酩酊の度を増すごとに、その明晰な頭脳は鋭く回転し、流暢な舌捌きは留ることを知らず、史学論から始まり女性論まで、諸々の社会事象をふまえ、論を展開してくださった。

また、現地調査で、新見（岡山）、吉田（広島）、平生（山口）等に

先生と御一緒したのであるが、どの地域に行っても、現地の研究者に、御自分が調査整理した、その地域の史料を提供し、地方の研究者との交流を図る姿勢（地域に根ざした姿勢）には、いつも頭が下る思いがしました。さらに、先生は、とても子煩悩なお人柄で、お宅に伺うと、幼稚園に通っているお嬢さんを肩に乗せ、散歩している姿にしばしばお目にかかりました。

以上、かいつまんで述べましたが、法政大学史学研究室を接点として、このように素晴らしい先生方と出会い、学問への真摯な姿勢を学んだことは、私にとって、生涯の貴重な宝物となりました。

（昭和五八年度院修了）

近世史ゼミの思い出

酒 井（旧姓藤枝）恭 子

ゼミは、三年、四年と二年連続して履修する必修選択課目であり、その選択は、二年生の十二月に最終的な希望を提供し、ほぼ決定される。そして新学期を迎え、初顔合せとなるのだが、私の場合はこの間にもうひとプロセス入る。実は他のゼミを希望していたが、やはり近世史ゼミに変更したいと、村上直先生に直接お願いに上がったのだ。この時初めて村上先生にお目にかかったが、先生は快く承諾してくださり、私は晴れて近世史ゼミの一員となることができた。

近世史ゼミは、三、四年合せて三十人前後という大所帯であ

り、その半数以上を女子学生が占めていたため、いつも明るく賑やかな雰囲気満ちていた。そして、学生の間で「村上ゼミ」と先生の名前で呼ばれていたように、指導教授の個性もまた大いに反映される場でもあった。しかし、週一回一時間半の授業時間内では、時間的にも人数的にも制約が多すぎて、無理に立てたスケジュールを消化するのが精一杯で、個々の持ち味を十分に発揮し、討論を展開させるというには至らず、自ずと印象薄いものとなってしまった。そんな中で思い出すのは、合宿や見学会といった校外での活動である。私がいた頃は、年間を通して五回くらいはあったように思う。

合宿では、静岡県浜名郡新居町で行われた夏合宿がまず思い起こされる。現在の新居町は、近世においては新居宿という東海道の宿駅のひとつとして栄えた。また陸上のみならず海上交通の要地であったところから関所が設けられ、今にその遺構を残している。合宿当時、新居町では町史編纂事業が進められている最中であつた。私たちは、史学科OBで愛知大学の渡辺和敏先生の御指導の下、文書の種類・整理から目録作成、写真撮影に至る一連の作業を通して、基本的な史料操作を実践で学ぶことができた。そして、四泊五日に及ぶ共同生活は、私たち学生同士の親睦をも深め、休み明けのゼミは、前にも増して和やかな雰囲気の中に始まった。

話は多少前後するが、この夏休みには、新居合宿の後に見学会も行われた。それは、横浜開港資料館で開かれた『横浜文書と歴史』講座の中の、村上先生の講演「江戸幕府の奉行と代官」を聴

き、その後横浜の史跡を見学しようというものだった。余談ながら、村上先生は、見学会に参加できない学生に教員のレポートを課されたが、往復五時間以上かかってやって来た友は、家でレポートを書いていた方が楽だったかしらと苦笑していた。この他にも、川崎の日枝神社周辺の見学会を行ったり、慶応義塾大学所蔵の「中井家文書」や明治大学刑事博物館を見学した。

このように、村上先生は機会を見つけては私たちをいろいろな所へ連れて行ってくださった。また先生御自身も講演に会強にと、どこへでも身軽に出かけて行かれた。先生の行動力には、若いはずの私たち学生の方が圧倒されてしまうほどである。それもみな、先生のお話によくしてくるお若い時分の、よく歩かれ、史料はすべて手で書き写されたという堅実な研究姿勢によるものにかがいない。また先生は、合宿や見学会には付きもののコンパを学年のはじめや終わりににも必ず行つた。ゼミの時間内だけでは、なかなか先生と個々の学生との交流までは得られないが、先生は合宿や見学会はもとより、コンパという教室の枠を取り払った場を設けて、学生一人一人に気軽に声をかけてくださるのだった。

先生のお人柄を語るうえで、ちょっとしたエピソードがある。私が四年になったばかりの頃だったと思うが、先生から電話をいただいた。意外なことに驚いていると、先生は、三年のある女子学生がゼミのことで悩んでいて、先生が聞くときつと話しずらいだろうから、君から相談につてあげてもらえないだろうか、とおっしゃるのだった。先生の優しくこまやかな一面に触れ、私は内容の深刻さとは裏腹に、なぜか嬉しく感じられたものだった。

最後になるが、二年の秋に近世文書をはじめて手にした時、私は近世との間に感覚的に抱いていた距離が、一瞬のうちに縮まったような気がした。それ以来その魅力に惹かれて解説を始め、今に至っている。そして、これから先も続けていくことになるだろう。私は、二年間のゼミを通して多くのことを学び、同時に言葉では語り尽せない多くのものを得ることができた。新年早々ペンを執りながら、卒論の清書をしていたちょうど四年前を思い出した。今傍らにはかすかに寝息をたてる娘がいる。この娘に何をどう伝えていくのか。私が学生時代に得た最高のものは、人生の伴侶であろうか。

(昭和五八年度卒業)

在学中の思い出

上 田 淳

十二月とは思えないほどあたたかなある日、職員室で同僚の教員と雑談をしていると、もう間もなく卒業する三年生の男子生徒が私のところへやって来て、来春から始まる学生生活について具体的にアドバイスしてくれないかという。推薦入学で、早々と私大の農学部へ進学が決定している生徒であった。しばらく考え込んでみたものの、どうも適切なアドバイスなどというものが私の頭の中には浮かんでこない。自分の専攻しようとする学問への取り組み方、下宿生活の方法など、一通りの応対がかわり、生徒が帰っていった後で改めて自分の学生生活というものを思い出し

てみた。私にとって法政大学での四年間の学生生活は、まだ「思い出」として語るほど月日を経たものではないような気がする。それに正直に言ってあの四年間というものが、現在の私にとって、どのような意味をもっているのか、私自身、いまだ充分にかみきれていない状態なのである。そのような状態の中で、あえて在学中の「思い出」らしきものを書き留めてみようと思う。

当時の私は、あまり講義を熱心に聴き、勉強をした学生ではなかった。講義が終わると(ある時はさぼったりもして)大学出ると靖国神社の境内を抜け、そのまま靖国通りを駿河台界隈まで下って行き、古本屋街を何時間もかけて歩き回った。先輩や友人から読んでみるとすすめられた石母田正や鶴見俊輔、藤田省三、橋川文三、丸山真男等々の著作を捜し回ったものである。こうして集めた本の中から、私は自分自身にとってとても重要であったある問題に対する答えを見つけ出そうとしていた。その問題というのは、「自分は、なぜ歴史を学ぶのか」そしてまた「現在、自分が歴史を学ぶということには、一体どのような意味があるのか」ということであった。現在、高校の社会科教員として、生徒達に歴史を教える立場になっても、この問題(あるいはテーマ)が頭から一時でも離れたことはない。日々の授業の中で、あるいは同僚の社会科教員との対話を通して、「歴史を学ぶことの意味」を問い続けている。ふりかえってみると、当時の史学科は、こうした問いかけに答えてくれるだけの教授陣や友人達にずいぶん恵まれていたように思える。倉持俊一先生や、弓削達先生の西洋史概説は、現在、自分達が置かれた状況の中で、歴史を学ぶという行

為にはどのような意味があるのかということや、歴史に対して主体的に働きかけてゆくことの大切さを私に教えてくれた講義であった。同様のテーマは、山名弘史先生の東洋史ゼミの合宿でも考える機会を与えられ、私の歴史に対する認識は鍛えられ続けた。この経験は、現在の私にとって、貴重な財産のひとつとなっている。

ところで、私が学生時代を過ごした四年間は、法政大学、そして史学科にとって、ひとつの転機となった時期ではなかったかと考えられる。そのひとつは多摩キャンパスの開設である。このキャンパスの開設をめぐることは、二部の学生を中心として、連日のように様々な学習や抗議集会が行なわれていた。私はどちらかといえば無関心派に属していた学生であったが、それでもあれほど抗議集会等でにぎやかであった市ヶ谷キャンパスが、多摩キャンパスの開設後は、一転して静まりかえってしまったことが、今でも印象的な出来事として記憶に残っている。

もうひとつは、演習の必修科目から選択科目への移行が、私の卒業間近に正式決定されたことである。私が専門課程にすんだ時、ある教授が講義の中で「最近の学生は、クラブ・サークルに對する帰属意識は強いがゼミや教員への帰属意識、親密感はない」とため息まじりに語っていたことがある。私も「親密」と言えるほど、専門課程で先生方に積極的に接触していた学生ではなかった。しかし、卒論をまとめる段階になるとそうはいかなかった。卒論を完成させていく作業の過程で、私は何度も現在の自分と、歴史とのかかわり方を考えざるを得なかった。正確には、

いつの間にか、考えざるを得ない状況に自分が追い込まれていたということになると思う。その中で、当然のことながら指導教員との真剣な対話や討論が繰り返されることになる。そのような場としての演習が選択科目になったということは、史学科も新たな歴史へ第一歩を踏み出した、ということになるのであろうか。いずれにしろ、五十周年をひとつの節目として史学科も時代の変化に対応しつつ、ますます発展していくのであろう。卒業生の一人として今後も史学科の着実な歩めを見つめ続けていきたいと思う。

(昭和六〇年度卒業生)

■思い出——現職教員から■

外濠今昔四十年

安岡 昭男

法政に通い始めたのは昭和二十三年（一九四八）春からなので、この三月末で、満四十年になる。そのころ市ヶ谷駅との間は外濠土手の周辺に人家が少なく、夜は淋しいので飯田橋駅を利用した。古風な旧通信博物館の建物が飯田橋会館の場所にあった。大学は戦災の痛手が大きく校舎不足のため、隣接の嘉悦学園の教室を夜間借用していた。高等師範部歴史地理科に一年間在籍して、新制大学の発足と同時に文学部史学科の一年生に移ったが、やはり嘉悦校舎での授業もあり、構内の近道を往来した。授業中によく停電になった時代である。高師部の学生は教職の人が多かったが、女生徒が清掃した廊下に、上履を面倒がり土足で上がって、和服姿の長沢規矩也先生（漢文学）に一喝されているのを見受けた。

二部の学生には相当の年配者もまじり、長老格の某氏が教員控室に顔を出したところ、藤井甚太郎教授は事務長が講義の迎えに来たものと勘違いし恐縮されたという。これは当の先生のお話であった。学生は藤井先生から世渡りの道も論された。史学科の学友では酒善正三郎さん（故人）が埼玉県の公立中学校の現職校長で通学しており、精力的に教室で牽引車の役を果たしてくれた。

古文書学の佐藤進一先生にお願いして東京大学史料編纂所の見学なども実施した。

大学院に進んだのは53年館が大学院棟として落成した年で、高校で世界史を教えながら、初年度には毎晩通い全科目を履修した。周藤吉之先生の東洋史科目など一対一という授業の日もあった。日曜日に出かける法政大学史学会の史蹟見学行事に、西洋史の竹内直良先生はじめ史学科の先生方が揃って参加されるので、他大学出身の院生が感心していたものである。

研究室助手を昭和三十三年四月から三年ほど勤めたが、なりたてに板沢武雄先生から雷を落とされた。通信教育の学生とのつながりもこの前後からで、芥川前助手から通教の『史学科だより』編集も引継いだ。考古学の斎藤忠先生は出講の折々、研究室に寄って新着紀要雑誌に目を通された。また土曜日ごとに専任の先生方が研究室で夕食を共にされるので、諸事打合せに好都合であった。第二58年館完成に伴い史学研究室が三階に入るが、それまで転々とした木造の建物は順次取壊されて現在は無い。

昭和三十八年度に岩生成一先生が兼任講師から教授に就任され、私も専任講師になった。授業には藤井・板沢・竹内先生はじめ河原正博・関野雄・和田久徳・丸山忠綱ほか諸先生方の講義方式から学び取らせて頂いた。それからでも二十五年の歳月が過ぎ去ろうとしている。今や近代的校舎が立ち並び、外濠公園周辺の景観も変って、往時を顧ると今昔の感に堪えない。

法政大学で学んだ頃の思い出

村上 直

私が法政大学文学部へ入学したのは、昭和二十三年四月であり、在学三年間は、未だ日本が敗戦の衝撃から十分に立直ることができずマッカーサーを総司令官とするGHQの占領下にあったときである。その頃、私は東京都下の北多摩郡昭和町（現、昭島市）に住んでいたから、青梅線で立川経由、中央線で飯田橋駅まで通ったが、今のような「快速」もあるわけではなく、大学までは随分遠い感じがした。世相も現在とはかなり違っていた。何しろ通学していた当時、帝銀事件や昭電事件の逮捕、第二次吉田内閣のもとで下山事件、それに三鷹事件（昭和二十四年七月）では、駅の付近に暴走した無人電車が横倒しになっていたのをみて、驚愕したことなどが思い出されてくる。松川事件そして朝鮮戦争の勃発（昭和二十五年六月）によって、横田基地に発着するアメリカの爆撃機が頭上を飛んでいる時代でもあり、他方では極東国際軍事裁判の判決や湯川博士のノーベル賞の受賞が報じられたものこの頃であった。どれも今、思い出すと遠い昔のように思えてならない。

当時の法政大学のキャンパスも、土手沿いの正門近くに薄暗い六角校舎があり、プレハブの校舎が並んでいた。土手には草が茂っており、隣りの東京通信病院は白亜の建物で、映画「暖流」のロケに使われたということで興味深く門の前を歩いたこともあった。

思 い 出

た。学生はテキストもなくノートも十分に手に入らず、焼跡の古色蒼然たる校舎や教室で勉強したが、それでも藤井甚太郎・丸山忠綱・岩生成一先生の日本史、竹内直良・中村英勝先生の西洋史、関野雄・周藤吉之先生の東洋史など熱のこもった講義を忘れることはできない。確かに勉強しようという意気込みは、今とは大別違っていたと思われる。私は当時、東京第一師範学校（現、東京学芸大の前身）を卒業し、勤めながら進学したため、現在の学生諸君のようにキャンパス・ライフを大いに満喫するというのではなく、勉強のとき以外の思い出は少ない。

しかし、卒業論文『近世に於ける新田開発の意義』は、現在の地域史研究の基礎になった点で、本当に有意義な三年間であったと思っている。昭和二十四、五年頃から、都下の多摩地域の農村調査に歩いた人は、今では数えるほどしかない。すでに多くの人が研究や教育の場から退いてしまったようである。私は大学を卒業し、他の大学で学び勤めてから、二十年目にはからずも法政大学史学科の専任教員として勤めることになった。近世史の岩生先生が定年退任された後任ということであった。それから十六年、その間に学部、通教、大学院の卒業・修了生の活躍はめざましく、活動の場が大きく広がっていくことに喜びを感じている。

史学科考古学研究室をふりかえって

伊 藤 玄 三

私が法政大学文学部史学科に赴任したのは、昭和四十九年四月

であった。それまで、法政大学における考古学関係の講義は齊藤忠先生や関野雄先生が担当されておられたのであるが、両先生共に兼任講師ということではあり、東京六大学と称しているにしてはこの分野では立ち遅れている感を免れなかった。

私の担当は考古学と日本古代史であるから、両専攻の学生の世話をするようにと豊田武先生に指示され、思えば五五年館二階西端の地理実験室を借りて演習を行ったのであった。その他には実習を行う教室が無いとのことであった。演習の内容も、『日本書記』と石器の取扱いというあたりから着手するように覚えていた。そして、演習の場所も五五年館から現第一校舎へと変遷し、不十分ながらも遺物などをひろげて作業が出来る状態にまで到達した。

この間、凡そ十四年を経過したことになる。研究室も、第Ⅱ五八年間三階の四畳半程の狭い部屋の板扉に『考古学研究室』の標板を貼りつけてのスタートであった。裏側のトイレの排気装置が時折けたたましい送風の音を響かせ、西日のきつい部屋であった。その後、この建物の北側に建てられた事務用プレハブ（現在出版局使用）の二階に一部屋が得られ、少しは場所が広くなった。この頃は、まだ学生運動が盛んであり、このプレハブは本来施設部用であったけれども、学生の標的となって壁面に穴があけられたりしていた。この部屋で少し整理作業が進められるようになって、調査報告書も二冊程作ることができた。そして、八十年館の完成に伴って旧図書館の再利用が検討され、史学研究室と共に現第一校舎の四階に移転したのである。

考古学の分野は、発掘資料を一面にひろげて作業する必要がある、製図などの場も要請される。その点で、ようやく多少学生も出入りできる状態になったといえよう。調査活動もそれに応じて可能となり、百周年記念事業という機会を得て、福島県本屋敷古墳群の調査を行ったことは特記すべきところである。予算配分の都合ということから三年に及んだこの調査の結果は、既に昨年『本屋敷古墳群の研究』として刊行しており、近年少なくなっている。大学刊行の研究報告としては堅実な成果であるとの評を得ている。学界で注目されている前方後方墳を調査対象とし、調査方法としても全面的な発掘の実施をはかったものであり、全体像を把握しようとしたものであった。このほか、これまでの調査では福島県寺前縄文中期遺跡・埼玉県与野での弥生・土師の住居址などの例もあり、本年夏には北九州市高津尾遺跡で弥生後期の墳墓の調査も実施した。

研究室の活動と共に、昭和五十一年からは卒業生も含めた「法政考古学会」を設立し、若手の研究者や卒業生・大学院学生の発表などを継続してきている。機関誌『法政考古学』も第十二集まで刊行してきた。又、昭和五十九年四月には「日本考古学協会」を法政大学を会場として開催した。開催に際しては、卒業生・在校生等約百名が準備に活躍し、二千余名の参加した全国学会を成功させることができた。開催を引き受けたものの、かなり危惧を抱きながらの準備ではあったが、研究室活動の底力が示されたものであったと思っている。

現在、研究室に於いては既調査の資料の整理と調査報告の作成

を若干抱えていて、学生も含めて作業に努めている。これから学界に問うものを少しでも加えんとする時期を迎えつつあるということになるのかと考えている。

ほめられたこと

倉持 俊一

この話は、一九七六年三月、飯田橋会館で開かれた史学科の謝恩会で披露し、その後数回、私のゼミの学生に話したことがある。

一九七五年九月二三日のことで、場所は都立S高校の校長室である。私はそこで校長さん、教頭さんと対談していた。当時、私はまだ東京教育大の文学部に籍があり、法政大学には、この年の四月から非常勤で勤めはじめていた。

一寸そのへんの事情について書くと、教育大で文学部教授会の反対運動もむなしく、一九七三年九月「筑波大学法」が成立したときから、私はこの新大学には絶対に行かぬことに決めていた。まだ私にも若さが残っていて、権力への反抗心も旺盛だったし、主義に殉ずるといった感傷、気負いもあった。そして幸運にも竹内直良先生から中村英勝先生を通して、法政に來ないかというお誘いがあり、それをおうけしていた。竹内先生は一九七五年三月に定年退職され、四月から私が専任として勤めなければならなかったのだが、教育大にはまだ学生もおおり、すぐ辞められぬ事情もあったので、非常勤として、法政で週に五コマ講義していた。

私がS高校を訪れたのは、教育大の教官として、同校で教育実習中の学生の研究授業を見学するためであった。S高校は新設まもない学校で、授業中の教室は静粛とはいえなかった。研究授業で、教頭さんをはじめ社会科学の教員や私が後ろの席にいるのに、マンガの本が堂々と回し読みされていた。

実習生のMさんも、おとなしい研究者タイプの女子学生で小柄でもあったので、生徒には、からかってやろうというような空気があったように思う。研究授業は、私の目からみても成功とはいえなかった。

終ってから校長室に案内されて、お茶を飲みながらの雑談となった。話というのは校長の次のような発言である。「いやー先生、実はいま教育大と法政大学から実習生が来ているんですが、校長として、どちらの学生を採るか云われれば、先生には悪いけれど、法政の学生を採りますね。そりゃー教育大の学生は勉強はできるかもしれないが、迫力というか気迫がない。あれじゃーいまの生徒は教えられない。そこへいくと法政の学生は、この時間には、これだけは、なんとしても教えるぞと気合が入っている。いまの教育は、こうでなくちゃあできませんよ。もちろん、私が法政と関係があることなど、S校の方は誰一人知らなかったのである。

思い出の記

中野 栄夫

私が法政大学に着任したとき、史学研究室は第Ⅱ五八年館にあり、私の研究室は大学院棟にあった。いずれも、誰がみても狭い部屋で、特に大学院棟の研究室は西陽があたり、夏場は非常に熱い部屋であった。倉持先生と合部屋であったが、二人とも研究室にすることはほとんどなく、またそこにいようななどは、とても思う気になれない部屋であった。研究会なども学外でしたものである。ただ、やがてきれいな研究室をもらえるという話を聞いていたので、それまでのがまんと、そんなに苦にならなかった。というのも、東京の大学はそんなものと、大学院時代から思っていたからであった。研究は自宅でするもの、そう思えば、それほど不満も起こらない。

図書館も狭くきたなかつた。今は八〇年館に立派な閲覧室と書庫とを備えたきれいな図書館があるが、着任当初、図書館は現在史学研究室のある第一校舎にあった。書庫は迷路のようできたなかつた。三階だか四階だかの書庫入口から入り、狭い階段を上り下りして、分かりにくい書庫の中を、本をさがしたものである。たとえるなら蟻の巣といったところであろうか。ただ、本の貸し出し手続きは、まったく帯出者まかせで、これは今も変わっておらず、法政大学の美風の一つにあげるべきであろう。

その後、八〇年館ができて図書館がそこに入り、史学研究室も

移転することになった。私は研究室は学生の溜り場であると思っていたし、研究室で研究をするつもりはなかつたので、きれいな研究室より学生のためのスペースが欲しかった。そんな考え方は倉持先生の御意見とも一致し、史学研究室は第一校舎の四階に移ることになった。ここは書庫もあり、スペースもまあまあなので、理想とはほど遠いにしても、法政大学の現状から見ると、賢明な選択だったように思う。

現在の研究室は、教育研究室とは別なので、学生も出入りしやすいようで、よく利用されているようである。また、本も最近充実してきたように思う。そのように環境がいくらか改善されたので、今後、学生・院生の研究のレベルアップも期待できるものと思われる。

私も、前の研究室のころは在室時間が短かつたが、最近パソコン・ビューターが研究室に入ったこともあって、在室時間が長くなつた。それは、学生と接する時間が長くなったことでもある。やつとこの大学になじめた感がする。

所 感

山名 弘史

私は専任教員の中では一番新しく、今年で五年目であつて、卒業生を四回送り出したのみであるので、思い出とことさら呼ぶに値するほどのものはない。そのかわり、四十人に満たない卒業生の顔は、名前を呼べば全員思い出すことができる。東洋史は専任

が一人であつて、しかも私自身の研究領域は極めて限られたものであるにもかかわらず、卒論として学生諸君が取り上げるテーマは広範囲にわたっている。この間に矛盾を感じることもあるが、今のところ敢えて範囲を制限してはいない。

学生諸君との付き合いで、やはり忘れ難いのは、年一回の合宿である。初年度五十八年は夏休み中に南伊豆の妻良^{めら}というところで行ない、シーズン外れまぎわの海水浴までした。二年目は富士セミナーハウスであつたが、勉強が目的で行つたというものの、レクリエーションのための場所が無いのに閉口した。三年目は小諸まで行つた。梅雨の末期で、前半は大雨であつた。懐古園を見ることができた。去年は再び富士セミナーハウスであつたが、快晴で、富士山と樹海の眺めを満喫した。どの年も幹事は仲々大変であつたと思う。二晩目に予定していたコンパのためのつまみ類を、一晩目にして消費してしまつたこともある。これまでに事故のなかつたことは幸いである。

もう一つ、以外に印象深いのは教育実習校の訪問である。実習生は私のゼミに属さない人の場合もかなりあるのであるが、実習前の顔合せ、実習校訪問日時の打合せ、研究授業参観というふうに、普段の学校生活には無い接触の機会があるためであらうか。研究授業はこちらもハラハラしながら見させてもらうのであるが、多くの場合、実習生は大学にいる時と違って、なかなかしっかりしたところを見せていた。これまでに東は柴又・篠崎から西は町田、北は西新井から南は羽田まで、いろいろな地域を見る機会を与えられ、東京も広いものだと思つたものである。

初年度に期末テストがかなりの混乱状態で行なわれ、一昨年度はテストができず、レポートへの切換えという事態にも見舞われ、学生諸君にも、もっと落ち着いた環境で勉強してもらいたいと思うのであるが、どういうわけか、これまでのところ波乱の有無と卒論のできの良し悪しとは、あまり相関関係が無いようである。